

共通事項

1) 鉄筋の表示記号

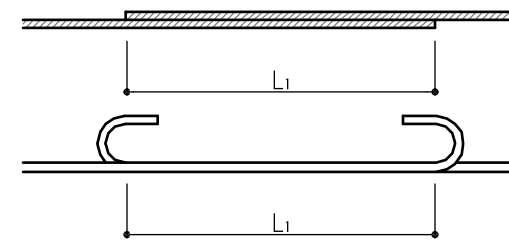
鉄筋径	D10	D13	D16	D19	D22	D25
表示記号	•	×	○	●	∅	⊙

2) 鉄筋の定着および継手長さ

註) d は呼び名に用いた数値とする。

鉄筋種別			21 N/mm ² ≤ F _s ≤ 27 N/mm ²				27 N/mm ² < F _s ≤ 36 N/mm ²			
形状	材質	フックの有無	L ₁ A	L ₂ B	L ₃ C	L ₄ D	L ₁ A	L ₂ B	L ₃ C	L ₄ D
異形鉄筋	SD 295A	有	30d	25d	15d	10d かつ 150mm以上	25d	20d	15d	10d かつ 150mm以上
	SD 295B SD 345	無	40d	35d	25d		35d	30d	25d	

A L₁ (重ね継手)の長さは下図に示す値とする。



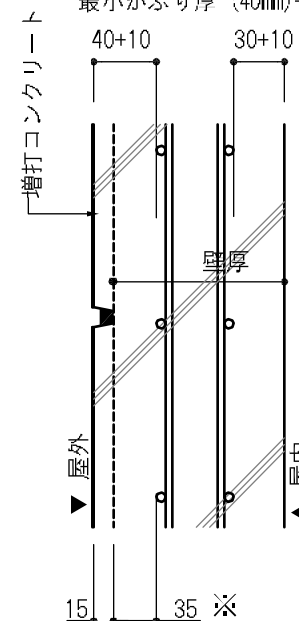
3) 鉄筋に対するコンクリートのかぶり厚さの最小値 **E**

構造部分の種類	コンクリートの種類		最小かぶり厚さ (mm)	設計かぶり厚さ (mm)
			普通コンクリート	普通コンクリート
土に接しない部分	スラブ 非耐力壁	屋外に面しない部分	20	30
		屋外に面する部分	30 (20) ^{*2}	40 (30) ^{*2}
	耐力壁 壁梁 手すり パラペット立上り	屋外に面しない部分	30	40
		屋外に面する部分	40 (30) ^{*2}	50 (40) ^{*2}
	擁壁	40	50	
土に接する部分	梁・スラブ・耐力壁・構造壁		40	50
	基礎・擁壁		60 ^{*1}	70 ^{*1}

*1 捨コンクリートはかぶり厚さに算入しない。

*2 ()内数値は、屋外に面している場合で、タイル貼り、又はモルタル塗り仕上げなど耐久性上有効な仕上げのある場合を示す。

・下図は外壁の設計かぶり厚さを示す。
※印は目地地からの設計かぶり厚さを示す。
性能表示適用により、外壁の設計かぶり厚さは目地地から 35mm、一般部分のかぶり厚さは、最小かぶり厚 (40mm)+10mmとする。



- A** L₁ は重ね継手長さとする。ただし、径の異なる鉄筋の重ね継手長さは細い方の呼び名の値による。また、図示のように末端のフックは、重ね長さに算入しない。
- B** L₂ は一般部分の定着長さを示す。(耐力壁端部曲げ補強筋、壁梁主筋、小梁、スラブの端部上端筋、耐力壁の縦・横筋)
- C** L₃ は小梁下端筋の定着および非耐力壁の縦・横筋の定着、継手長さを示す。
- D** L₄ はスラブ下端筋の定着長さを示す。ただし壁梁の曲げ強度算定時に下端筋を算入する場合には L₂ とする(図面特記)。耐力壁の下端筋は引張力を受けるので L₂ とする。片持スラブの下端筋の定着は、小梁下端筋用の L₃ とする。
- E** 各部位の設計かぶり厚さに関する基本的な考え方については、SW-013を参照のこと。

- 附記事項
- ・L₁, L₂ の長さは計算により定める場合は、本表の長さによらないことができる。
 - ・表に示す「最小かぶり厚さ」は、「仕上の品質確保の促進等に関する法律」に示される値で、建築基準法の値とは異なるものである。
 - ・本詳細図においては壁の幅止め筋は、防錆処理(溶融亜鉛めっき等)を行なうこととし(図面特記にて記載のこと)。かぶり厚さの対象とはしない。なお、幅止め筋を縦筋にかける場合は、そのピッチを通常の1/2とする。その場合には防錆処理は不要とする。
 - ・以下、標準図における表示は、設計かぶり厚さによる表示を行なう。

- 改訂事項
- ・コンクリートの強度区分を JASS5 と整合させた。
 - ・附記事項に防錆処理の仕様および防錆処理不要となる場合の説明追加。
 - ・附記事項に、L₁, L₂ に関する特記を追加

4) 鉄筋の折曲げ規準

(a) 鉄筋末端の折曲げ形状 D

註) ・d は呼び名に用いた数値とする。
 ・D は鉄筋の折曲げ内のり直径を示す。

鉄筋の折曲げ角度	鉄筋の折曲げ形状	鉄筋の種類	鉄筋の折曲げ内のり直径 (D)	鉄筋余長 (L)	備考
180°		SD 295A SD 295B SD 345	※ 4d 以上	4d 以上	
A 135°		SD 295A SD 295B SD 345	※ 4d 以上	6d 以上	
B 90°		SD 295A SD 295B SD 345	※ 4d 以上	4d 以上	
C 90°		SD 295A SD 295B SD 345	※ 4d 以上	8d 以上	 キャップタイ スラブと同時に打込む 口形のキャップタイにのみ用いる。 キャップタイ スラブと同時に打ち込む U 形のキャップタイにのみ用いる。 (片側スラブ付壁梁)

※ D16以下は 3d 以上

(b) 鉄筋中間部折曲げ形状

註) ・d は呼び名に用いた数値とする。
 ・D は鉄筋の折曲げ内のり直径を示す。

鉄筋の折曲げ角度	鉄筋の折曲げ形状	鉄筋の使用箇所による呼称	鉄筋の径による区分 (d)	鉄筋の種類	鉄筋の折曲げ内のり直径 (D)
90° 以下		i) 常筋 あばら筋 スパイラル筋	各種	SD 295A SD 295B SD 345	※ 4d 以上
		ii) スラブ筋 壁筋	D16 以下	SD 295A SD 295B	4d 以上
			D19 以上		iii) と同様
iii) i) ii) 以外の鉄筋	D25 以下	SD 345	6d 以上		

※ D16以下は 3d 以上

仕

様

A 135° フックは耐力壁の横筋(開口部側末端部)、あばら筋の末端部に用いられる。

B 90° フック余長 4d の鉄筋は、耐力壁の開口部側末端部に用いられる。

C 90° フック余長 8d の鉄筋は、スラブと同時に打込み、一体となる T 形および L 形壁梁の U 字形あばら筋とセットで用いるキャップタイのみに用いられる。

D フックを必要とする末端部を次に示す。
 ① 耐力壁の横筋の開口部側末端部、あばら筋

附記事項

改訂事項
 ・ D フックを必要とする部位の改定

名称
 共通事項(2)

縮尺
 SW - 001

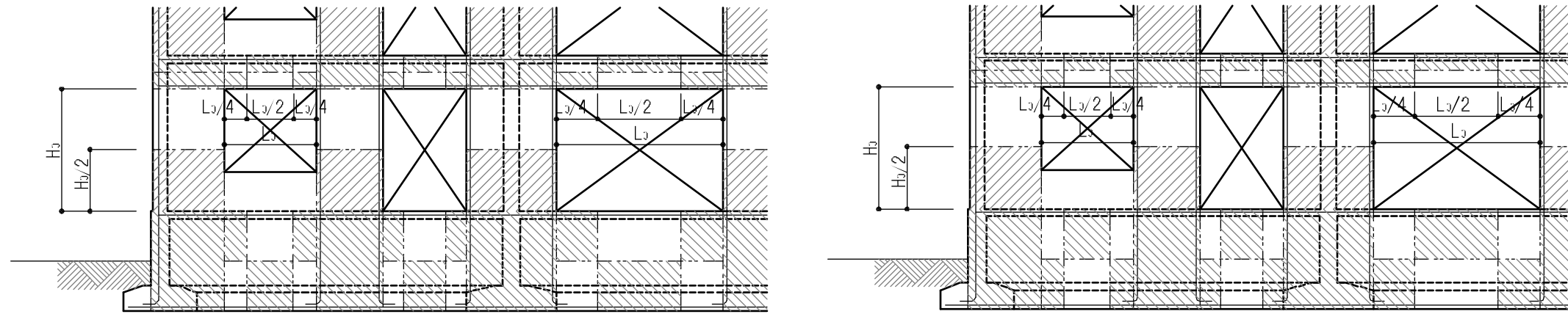
5) 鉄筋の継手位置 A B

(a) 耐力壁筋, 耐力壁端部曲げ補強筋, 交差部補強筋, 壁梁主筋, 基礎梁主筋

耐力壁筋, 耐力壁端部曲げ補強筋, 交差部補強筋の継手の好ましい位置 壁梁主筋, 基礎梁主筋の継手の好ましい位置 継手の好ましくない位置

①基礎梁が地反力を受ける場合

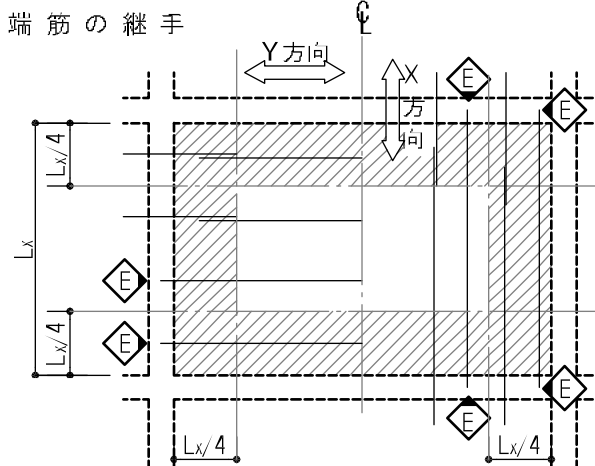
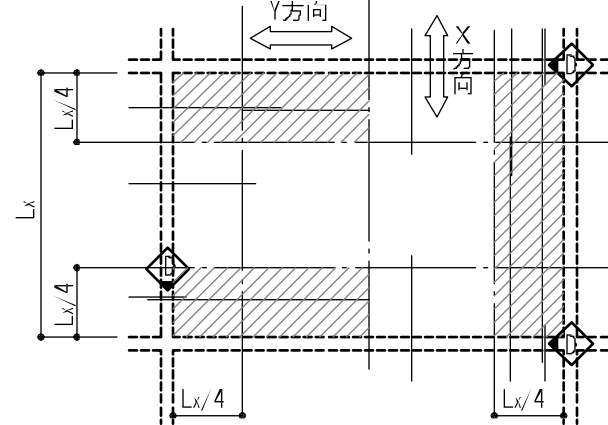
②基礎梁が地反力を受けない場合



(b) スラブ筋の継手の位置 C

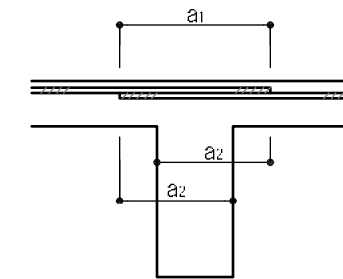
① 上端筋の継手

② 下端筋の継手

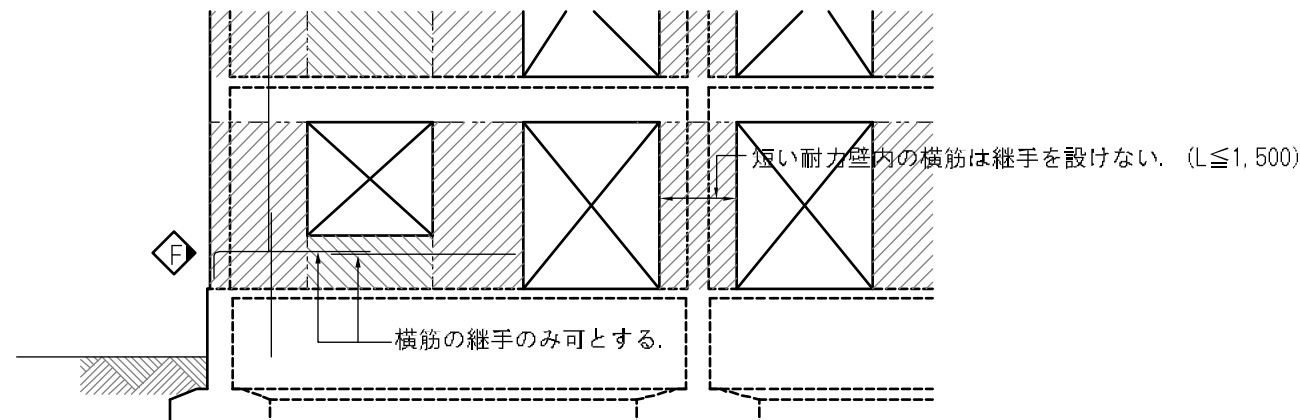


・スラブの上端筋

$a_1 \geq L_1$ または $a_2 \geq L_2$ とする. D

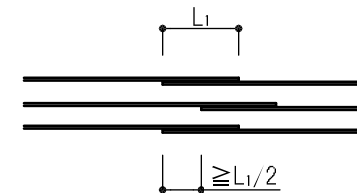


(c) 壁筋の継手の位置

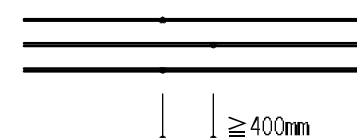


6) 鉄筋の相互のずらし方 A

(a) 重ね継手のずらし方



(b) ガス圧継手のずらし方



- A 鉄筋の継手は原則として応力の小さい箇所であつ常時はコンクリートに圧縮応力が生じている部に設ける。また、継手は一箇所所に集中することなく、相互に隣り合つた場合を原則とする。なお、ガス圧継手の場合も原則的には本図に準ずる。
- B べた基礎のスラブ筋の場合は、本図で上端筋を下端筋、下端筋を上端筋と読みかえる。
- C 梁幅内にはスラブ筋の継手を設けないことが望ましい。継手を設ける条件として、位置は柱列帯 (SW-003を参照) に限り、 $a_1 \geq L_1$ または $a_2 \geq L_2$ の場合のみ設けてもよい。
- D 下端筋は継手を設けず梁に定着 (定着長さ L_4) する機会が多い。壁式構造の場合は、可能な限り連続するスラブ内に定着する。
- E 原則として、壁梁の中には壁筋の継手を設けないこと。ただし縦筋を定着することは差し支えない。

仕様

附記事項

改訂事項

名称

縮尺

- ・ (a)② を追加
- ・ (b)② 下端筋の継手が好ましい位置を修正

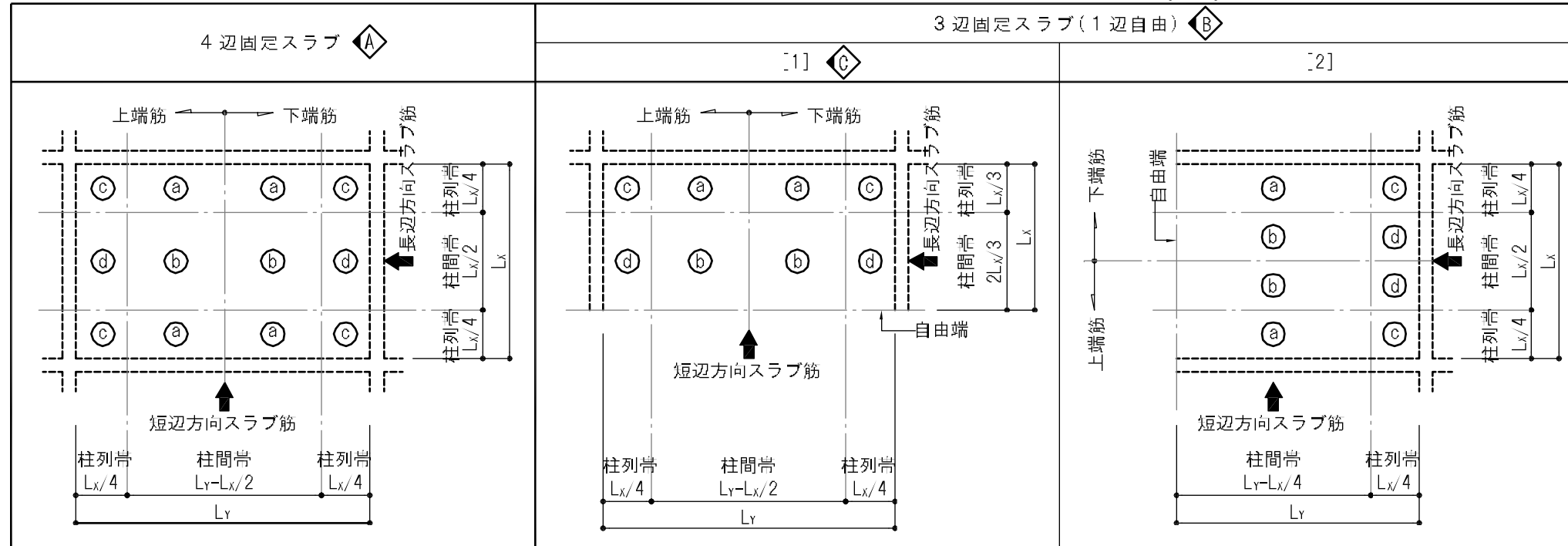
共通事項 (3)

SW -002

スラブ配筋標準

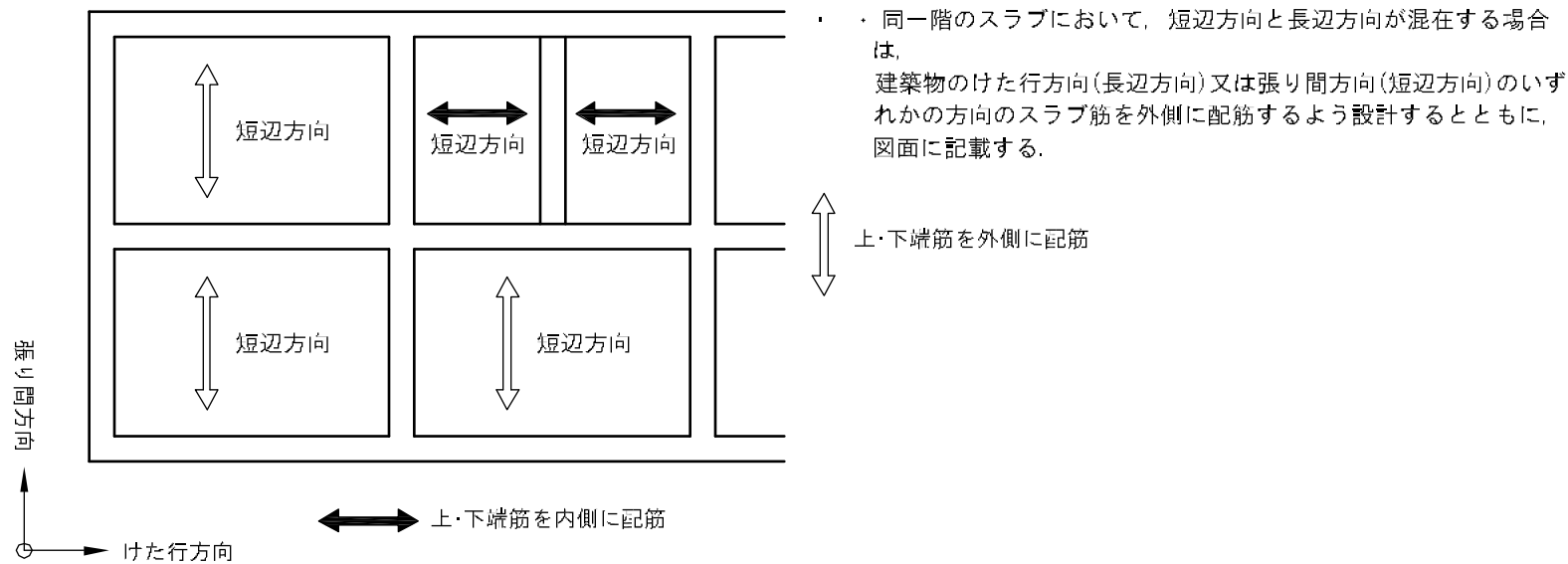
1) スラブ配筋規準

(a)~(d)は下表リストの同符号に対応する。



スラブ配筋リスト(例)

No.	板厚	位置	短辺方向			長辺方向			備考
			柱間帯		柱列帯	柱間帯		柱列帯	
			端部 (a)	中央 (b)	端部・中央 (c, d)	端部 (d)	中央 (b)	端部・中央 (c, a)	
		上端筋		(D)	(E)		(D)	(E)	
		下端筋			(E)			(E)	



(A) スラブの梁面より $L_x/4$ の位置を柱間帯の鉄筋変化位置とする。この位置には上端筋に D13 を配する。原則としてバンド筋は使用しない。

(B) [2] の場合の柱間帯スラブ鉄筋変化位置は (A) 同様、梁面より $L_x/4$ の位置とする。[1] の場合、長辺方向は $L_x/4$ 、短辺方向は $L_x/3$ の位置を柱間帯鉄筋の変化位置とする。なお、この位置には上端に D13 を配する。原則として、バンド筋は使用しない。

(C) [1] のスラブで $L_y/L_x \geq 2$ となる場合、片持ちスラブに準じて設計および配筋する。

(D) 中央上端筋(図中の (b) 部分)は端部上端筋を1本おきに通すこと。

(E) 柱列帯の配筋は、柱間帯の配筋の $1/2$ (断面積比)、かつ下表の値以上とする。

柱間帯端部 上端筋	柱列帯上・下筋
D10 D13@150	D10 @200
D10 D13@200	D10 @250
D10 D13@250	D10 @250

D13 のみ場合は上表の D10 を D13 と読みかえて運用する。

仕
様

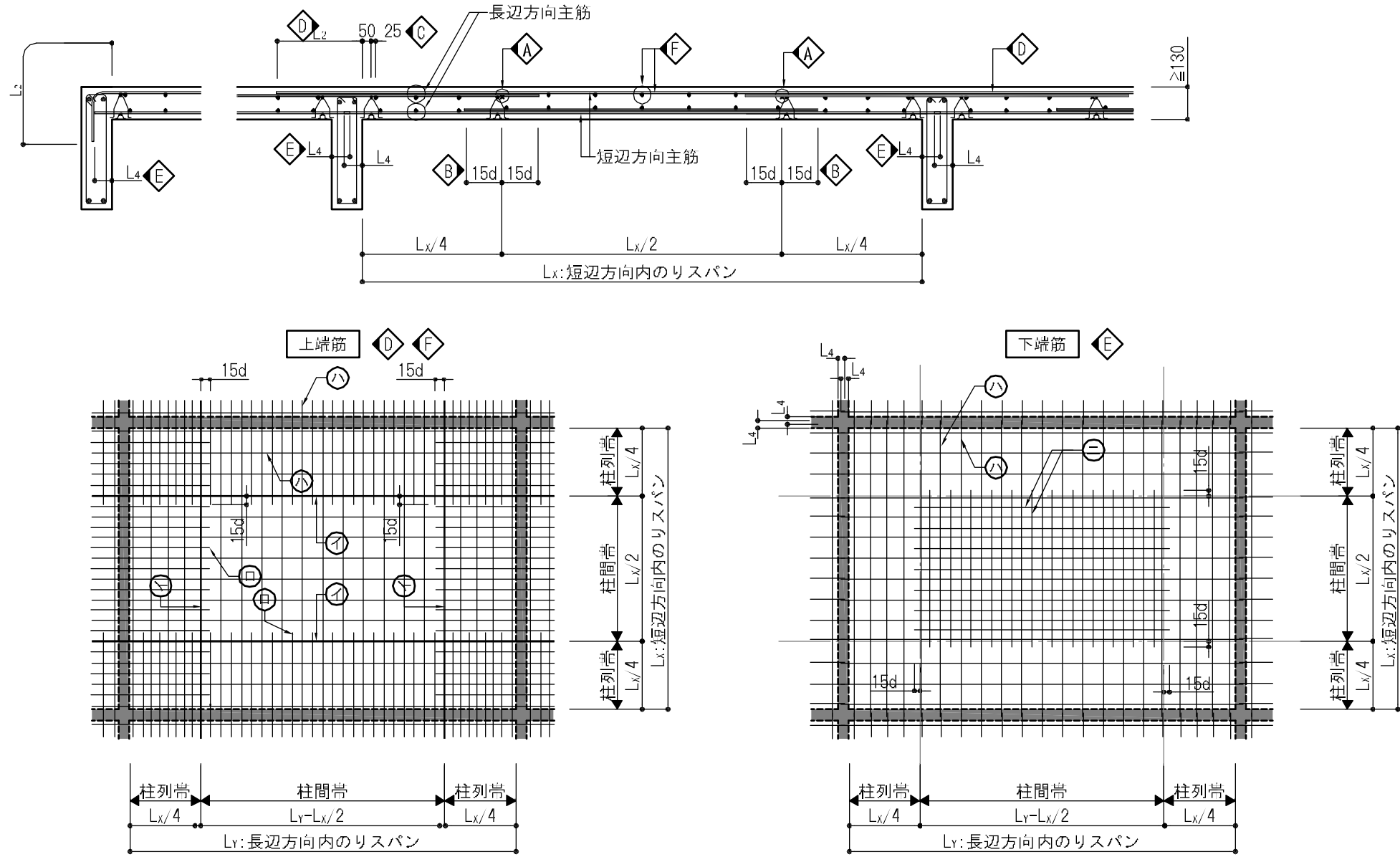
・スラブ下支柱はコンクリート打設後 7 日以上、下部 2 層に存置する。
 ・大型スラブ(在来工法のスラブでのり面積が 24 m^2 を超える場合はスラブを支持する支保工の存置期間を 28 日以上とする。

・配筋要領図を追加。
 ・大型スラブの規定を附記事項に記載し、スラブの規定は削除

名称 スラブ配筋標準(1)

縮尺 SW - 003

2) スラブ配筋要領

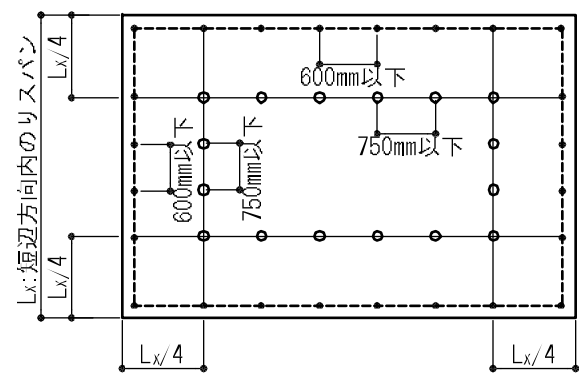


- ① 肩筋 D13 以上
- ② カットオフ筋
- ③ 通し筋
- ④ 下端中央主筋(切断筋)

仕
様

- Ⓐ 肩筋は D13 以上とする。この位置の鋼製バーサポート等は 3) に示す要領により配する。
- Ⓑ 上端のカットオフ筋および切断される下端筋中央部は $L_x/4$ (長辺方向も $L_x/4$) より 15d 延長する。
- Ⓒ 鋼製バーサポート等を使用する場合の配置にあたっては、これと平行な上端筋とのあきを 25mm 以上確保すること。
- Ⓓ 上端筋の定着は L_d とし、隣接スラブに定着する。鉄筋が連続する場合は通し筋とし、連続しない場合には SW-002 (b) による。なお、柱間帯上端筋は梁内には継手を設けないことが望ましい。
- Ⓔ 下端筋の定着は L_d とし、梁内または隣接スラブに定着する。鉄筋が連続する場合は上端筋と同様な処理をよ。
- Ⓕ 柱間帯中央上端筋は端部上端筋を一本おきに通す。

3) スラブスペーサー配置要領

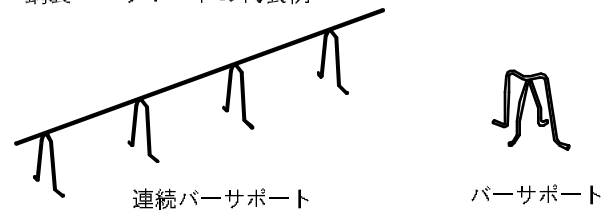


プラスチックスペーサー
または鋼製バーサポートの間隔

- : 600mm以下
- : 750mm以下

— 肩筋 (D13 以上)
- - - 床端部配筋

鋼製バーサポートの代表例



[1] 住戸部分スラブの上端筋用スペーサー

住戸部分スラブの上端筋には、プラスチックスペーサーまたは鋼製バーサポート(いずれも鉄筋ずれ止めのあるもの)を肩筋の位置(印にて示す)に 750mm 以下の間隔で設置し、スラブ端部配筋の位置(印にて示す)に 600mm 以下の間隔で設置する。ただし、短辺方向の長さが $3m^2$ 以下の場合には、スラブ端部肩筋位置のスペーサー間隔を 750mm 以下とすることができる。

[2] 住戸部分スラブの下端筋用スペーサー

住戸部分スラブの下端筋には、プラスチックスペーサー(下端筋用爪付き)または鋼製バーサポート(いずれも鉄筋ずれ止めのあるもの)をスラブ $1m^2$ 当り 2 個程度の割合で設置する。

・鋼製バーサポート性能基準

- スラブなどに使用する鋼製バーサポート等は、次の規格に適合するものとする。
- (1) 安定しており、かつ容易に転倒しない形状であること。
 - (2) コンクリート表面に錆が出ないように、脚部等コンクリート表面に出る恐れのある部分に防錆処理(溶融亜鉛めっき又はプラスチックコーティング等)がなされていること。
 - (3) 平滑な鋼板で 1 箇所あたり 1.2kN の鉛直荷重に対し、塑性変形しないこと。また、木製パネル上で 1 箇所あたり 1.2kN の鉛直荷重に対し、著しいめり込みを生じないこと。

・プラスチックスペーサー性能基準

- (1) 77°C の温度で、90N の荷重に耐えること。
- (2) 74°C ~ 80°C に 6 時間放置後、20°C に戻し、ひび割れがないこと。
- (3) -13°C ~ -17°C の低温下で、約 25N のおもりを高さ 30cm より落下させ、毛細状ひび割れを生じないこと。

附
記
事
項

改
訂
事
項

- ・図の表示方法を変更
- ・Ⓕ 下端中央主筋(切断筋)を追加
- ・鋼製スペーサーを鋼製バーサポートに変更
- ・鋼製バーサポート性能基準で 1.2kN を 12kN に修正し、また防錆処理の仕様を追加
- ・プラスチックスペーサー性能基準を追加
- ・鋼製バーサポートの姿図追加

名
称

スラブ配筋標準(2)

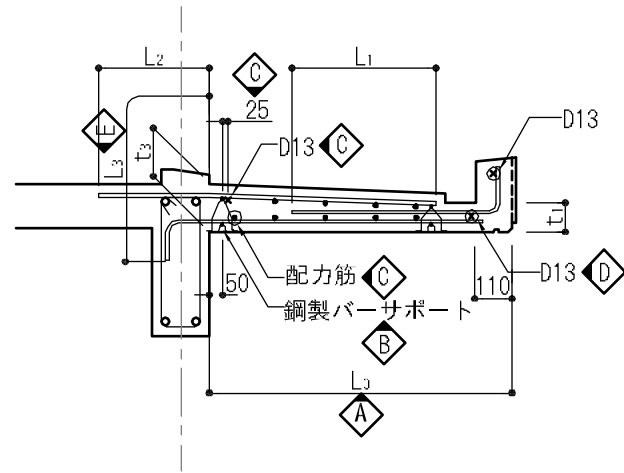
縮
尺

SW - 004

4) 片持ちスラブ配筋要領

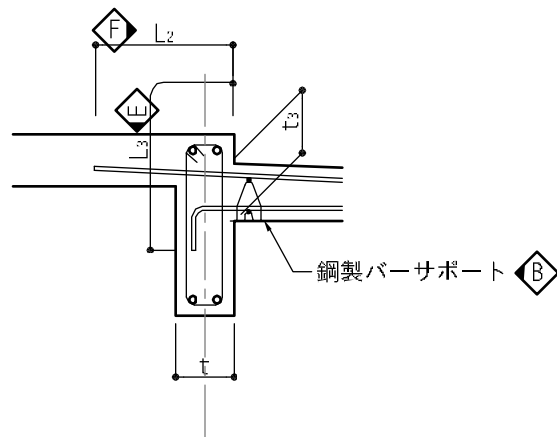
(a) 隣接スラブと連続する場合

- ・隣接スラブと片持ちスラブ厚（元端スラブ厚）が異なる場合

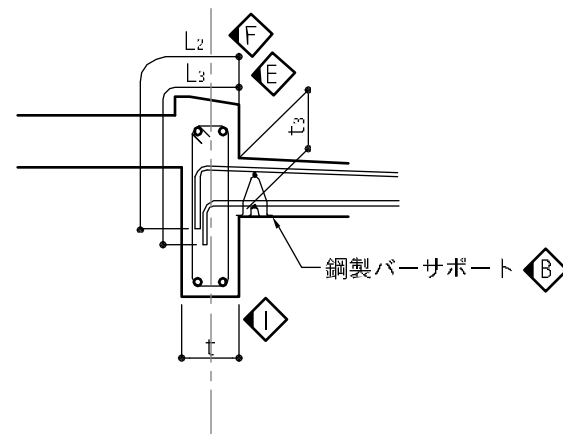


(b) 隣接スラブと段差がある場合

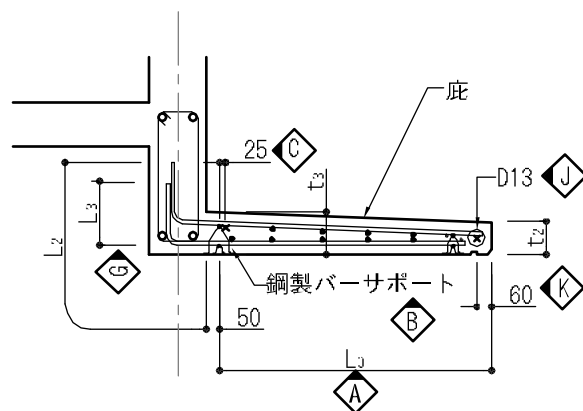
- i) 隣接するスラブに上端筋が直線定着可能な場合



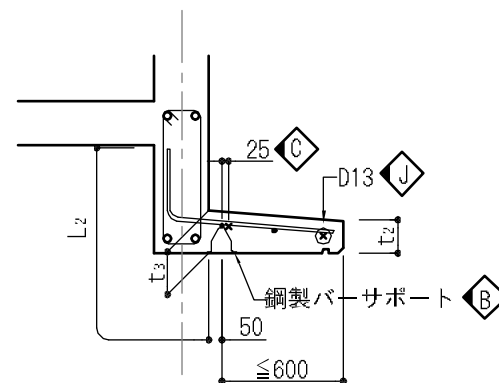
- ii) 隣接するスラブに上端筋が直線定着できない場合



(c) 逆Tスラブとなる場合

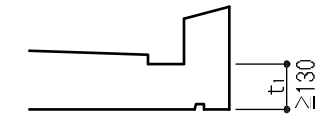


(d) シングル配筋としてよい片持ちスラブ



片持ちスラブの元端の厚さ t_3 は設計図によるほか、下記の数値以上とする。

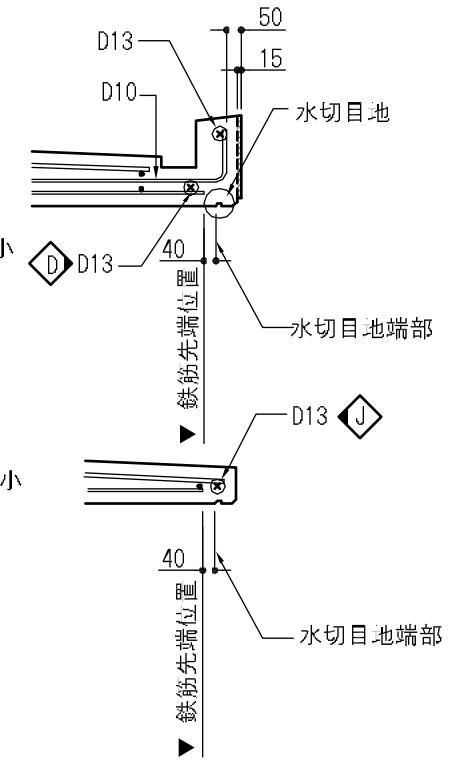
位置	L_0 (mm)	t_3 (mm)
バルコニー 廊下	$L_0 \leq 1,000$	160
	$1,000 < L_0 \leq 1,400$	180
庇	$600 \leq L_0 \leq 1,300$	150
	$1,300 < L_0 \leq 1,500$	180



排水溝がある場合の先端部最小厚さ t_1 は、130mmとする。



排水溝がない場合の先端部最小厚さ t_2 は、120mmとする。



仕様

- Ⓐ 片持ちスラブは $L_0 \leq 1,400$ mm とする。それを超える長さとなる場合は片持ち梁にて補強する。
- Ⓑ 片持ちスラブの上端・下端筋は、鋼製バーサポート等を用いて位置の保持を確実に行う。ただし、鋼製バーサポートの受筋は配力筋としては扱えない。
- Ⓒ 位置確保のための鋼製バーサポート等から25mm程度の位置に配力筋を配置する。また、下端には鋼製バーサポート等の脚に隣接して配力筋を配置する。
- Ⓓ 先端立上り部内の縦筋の受筋は、1- D13 以上を配置する。下端筋は水切目地位置から 40mm の位置で止める。なお、配力筋の間隔は 250mm 以下とする。
- Ⓔ 片持ちスラブの下端筋の定着は L_3 とする（通常のスラブと異なるので注意すること）。
- Ⓕ 隣接するスラブと段差のある場合も、可能な限り隣接スラブ内に直線定着とし、不可能な場合のみ梁内定着とする。
- Ⓖ 逆Tスラブの場合の下端主筋の定着長さは、折曲げ位置より L_3 とする。
- Ⓗ 片持ち長さ 600mm 以下のものは、特記なき限りシングル配筋としてよい。
- Ⓘ 片持ちスラブ筋の折曲げ位置は梁断面の中心線を越えた位置とする。
- Ⓙ 片持ちスラブ上端筋の先端には、1-D13以上の受筋を配置する。
- Ⓚ 片持ちスラブ配力筋の第一鉄筋は先端から 60mm の位置に配置する。

附記事項

改訂事項

- ・「鋼製バーサポート等」の表示。
- ・(b)梁中間部受筋の取止め
- ・Ⓑ Ⓒ の改定
- ・Ⓙ Ⓚ を追加

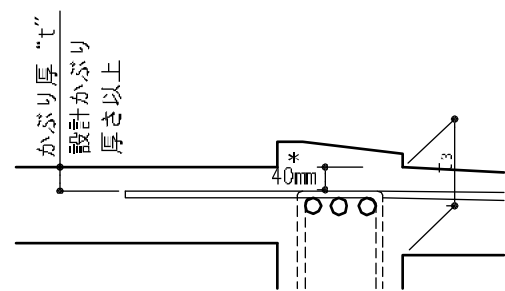
名称

スラブ配筋標準 (3)

縮尺

SW - 005

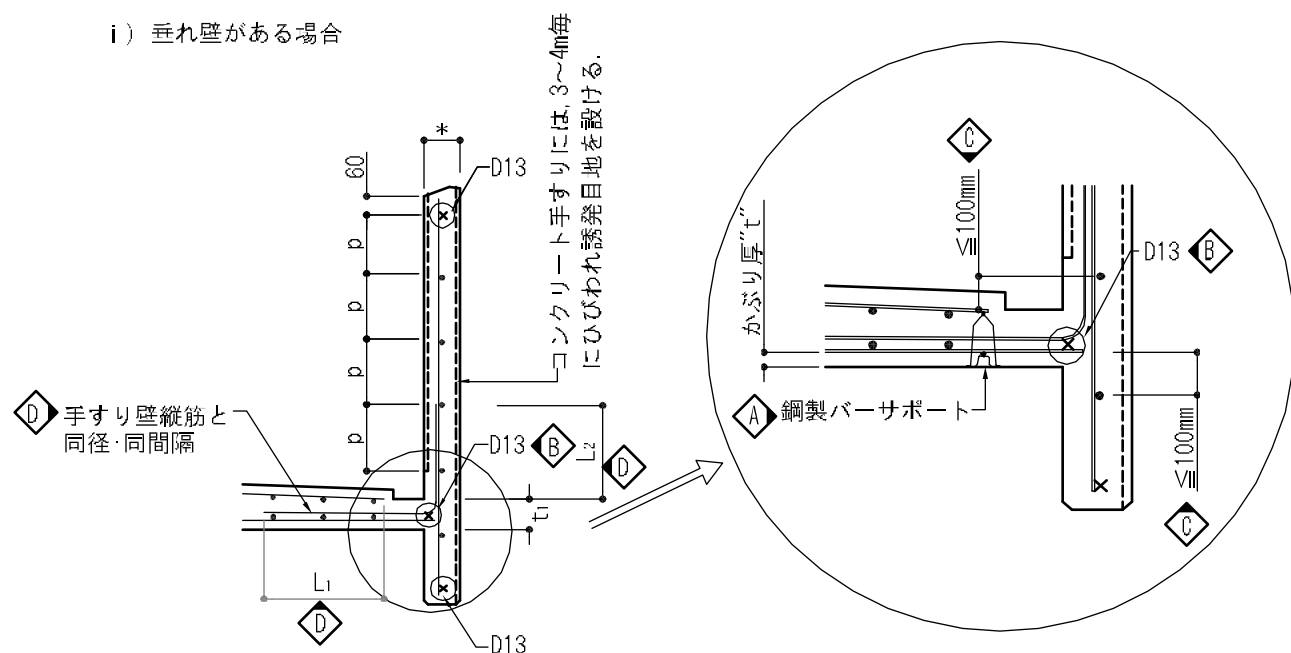
(e) 片持ちスラブかぶり厚さ



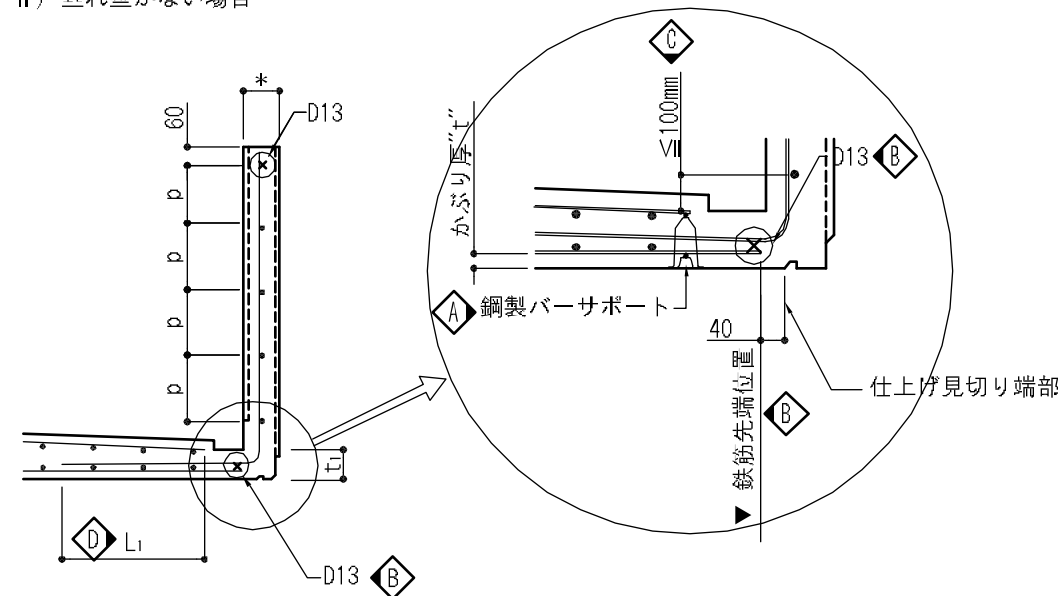
* 片持ちスラブリの鉄筋が隣接するスラブリに内に定着される場合、片持ちスラブリに勾配がついているため、上端筋を勾配なりに配筋すると、定着端でのかぶり厚「t」が不足する。このため梁位置で片持ちスラブリ上端筋を水平に折り曲げる。

(f) 片持ちスラブリ先端とRC造手すりとの配筋納まり * 手すりの厚さは設計図による。

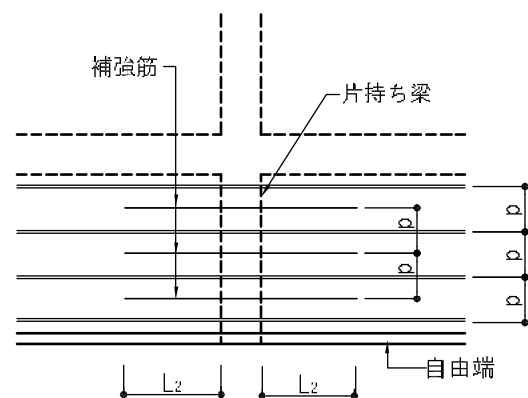
i) 垂れ壁がある場合



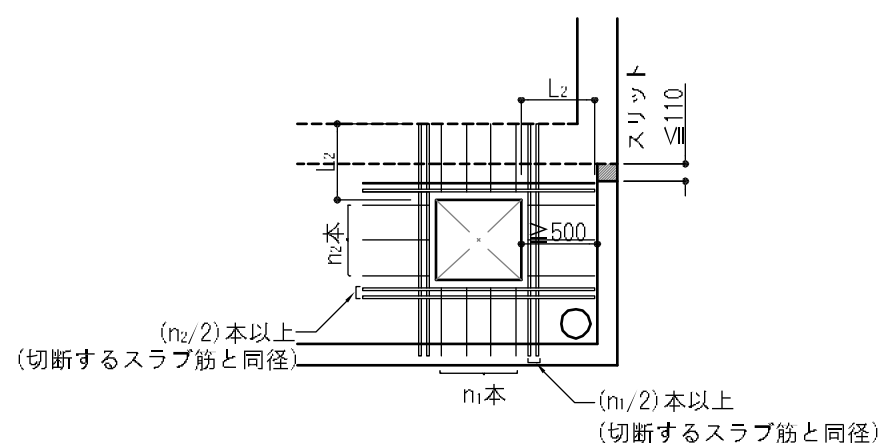
ii) 垂れ壁がない場合



(h) 片持ち梁位置の配筋補強要領

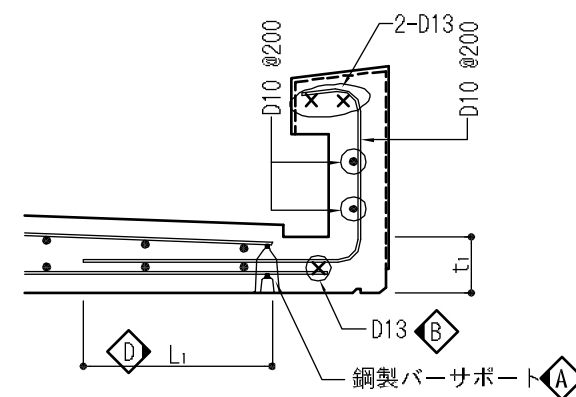


(i) 避難用開口部位置と補強要領 RC造手すり端部のスリット



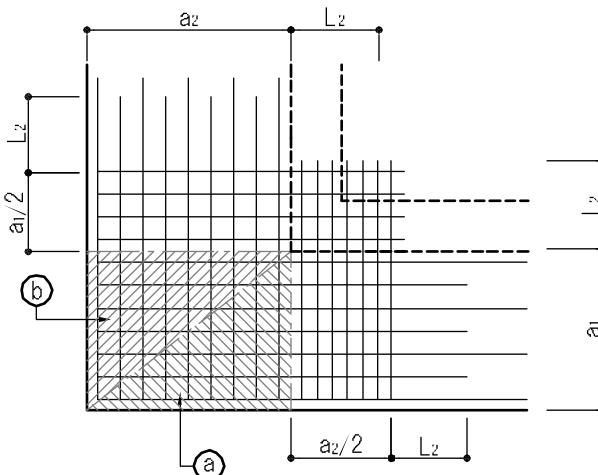
(j) パラペット配筋要領

パラペットの形状は AE-301 による。



(g) 片持ちスラブリ出隅部補強

①部分の荷重による応力に対する配筋は、 $a_1/2$ の範囲内に行なう。



②部分の荷重による応力に対する配筋は、 $a_2/2$ の範囲内に行なう。

仕
様

- ① 片持ちスラブリの主筋は鋼製バーサポート等を用いて所定の位置を確保する。
- ② 先端のRC造手すり縦筋の受筋は 1-D13 以上を配置する。片持ちスラブリ下端主筋は、水切り目地端部から 40mm の位置で止める。なお、片持ちスラブリの配筋間隔は 250mm 以下とする。
- ③ 先端手すり壁の横筋は、片持ちスラブリ上端筋および下端筋の上下 100mm 以内に配筋し、他の横筋の割り付けを行う。
- ④ 手すり壁がスラブリの上部のみの場合、手すり縦筋をスラブリ上端筋と L_1 のあき重ね継手とする。垂れ壁がある場合は、手すり壁の縦筋を垂れ壁まで延長し、L 型の補強筋を配置する。L 型の補強筋と片持ちスラブリ上端筋は L_1 のあき重ね継手とする。
- ⑤ 片持ちスラブリ隅角部は、斜め筋による補強は行なわず(補強筋を記すと 6 段筋となるため)、配筋の本数を増して隅角部応力を処理する。かつ①+②部分の荷重を a_1, a_2 間の各々の鉄筋で個別に処理する。
- ⑥ 片持ち梁の上端位置にはひび割れ防止用の補強を行う。補強筋は配筋筋と同径・同間隔とする。この補強筋は片持ちスラブリ内に L_2 の定着をとる。
- ⑦ 避難用の開口は、手すり端部より 500mm 以上離して設ける。

附
記
事
項

- ① ② の改定
- ③ 「アンカー」を「あき重ね継手」に改定し、継手位置を明示
- ④ (i) 開口補強要領を明示

名
称

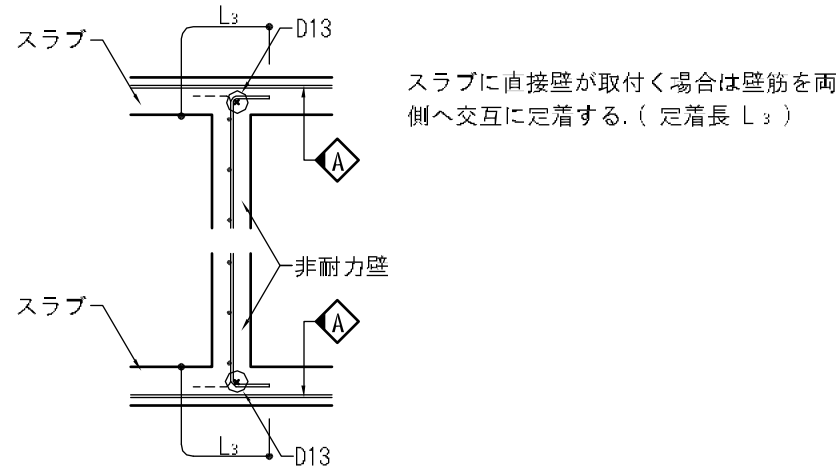
スラブリ配筋標準 (4)

縮
尺

SW - 006

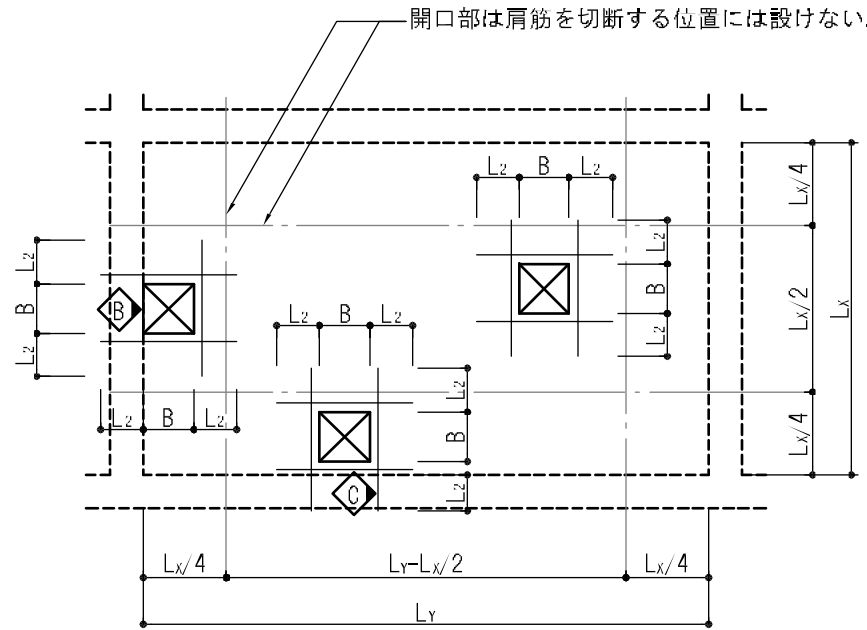
5) スラブ補強筋配筋要領

(a) 壁受け部分のスラブ補強



(b) スラブ開口部補強

- i) $B < 200$ のとき 補強筋不要
- ii) $B > 600$ のとき 各工事の設計図による。

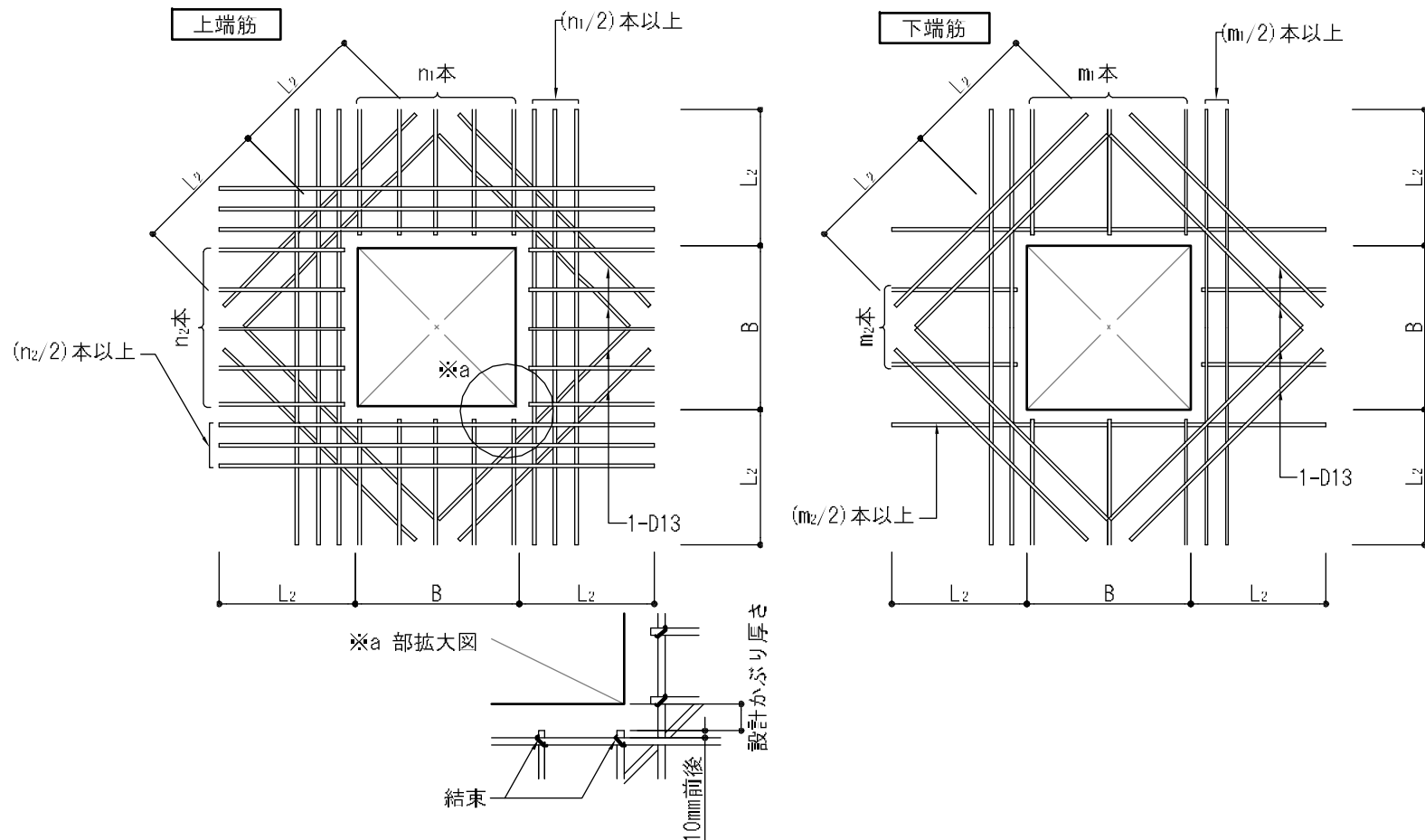


iii) $200 \leq B \leq 600$ のときの開口補強筋は下表による。

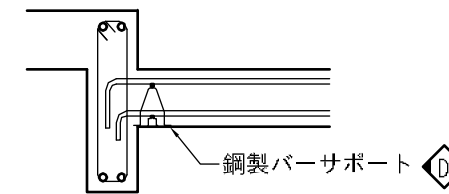
B (mm)	縦・横筋本数 *1		斜筋 *2
	上端筋	下端筋	
$200 \leq B < 400$	$n_1/2, n_2/2$	$m_1/2, m_2/2$	1 - D13
$400 \leq B \leq 600$	$n_1/2, n_2/2$	$m_1/2, m_2/2$	2 - D13

*1 補強筋の径は切断するスラブ筋の最大径とする。
 *2 斜筋はスラブ上端筋と下端筋の内側に配筋する。
 ・ n_1, n_2, m_1, m_2 は切断される鉄筋本数を示す。

開口部補強要領



(c) 梁中間にスラブが取付く場合



仕
様

- ◇A 最上部スラブは壁による支持のため、上端に固定モーメントが生じる可能性があり、壁下部スラブは壁の重量により下端に付加曲げモーメントが生じる。この曲げモーメントに対する補強筋があるので注意する。
- ◇B 梁側面に沿って開口がある場合、梁側の開口補強筋は不要とする。開口周囲の補強筋の梁への定着長は L_2 とし、他の周囲の補強筋長さも L_2 の定着長とする。斜め補強筋長さは $2L_2$ とする。
- ◇C 開口補強筋が梁にかかる場合、梁側面より定着長 L_2 とする。他の補強筋は L_2 の定着長とする。
- ◇D スラブの上端・下端筋は、鋼製バーサポート等を用いて位置の保持を確実にする。ただし、鋼製バーサポートの受筋は配筋筋としては扱えない。
- ◇E 在来スラブの開口補強を行なう場合、上端・下端の配筋の間に斜め筋の配置が可能であるか検討し、配筋ができない場合はスラブ厚の変更を行なう。
- ◇F SW-009に示す出隅部・入隅部・形状変形部の補強筋と開口補強筋が同一位置となる場合は、SW-007の補強筋を優先して配筋を行う。

附
記
事
項

改
訂
事
項

名
称

縮
尺

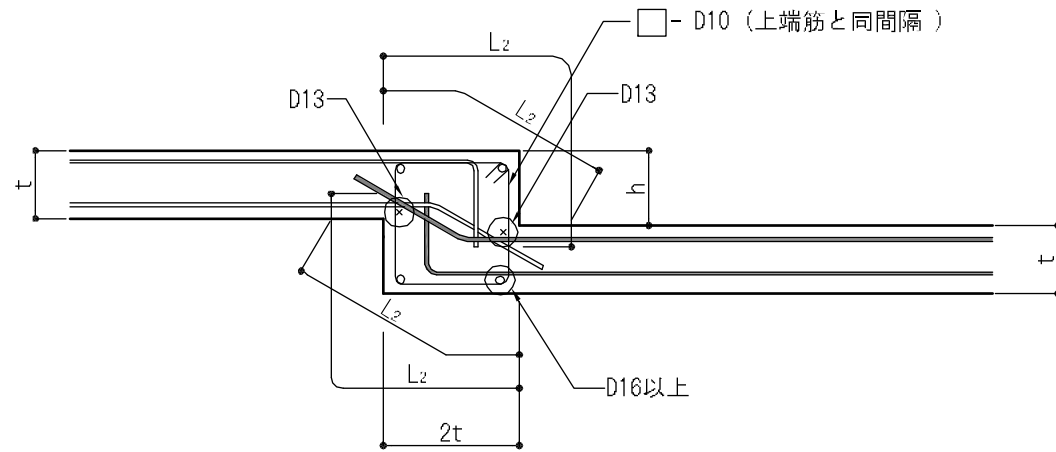
- ・図の項目順入れ替え
- ・開口部補強筋の縦・横筋本数、および定着長さを改定
- ・(c)梁中間部受筋の取り止め
- ・(d)スラブ段差部配筋要領を別途表示とし、この図面から削除。
- ・◇の追加

スラブ配筋標準(5)

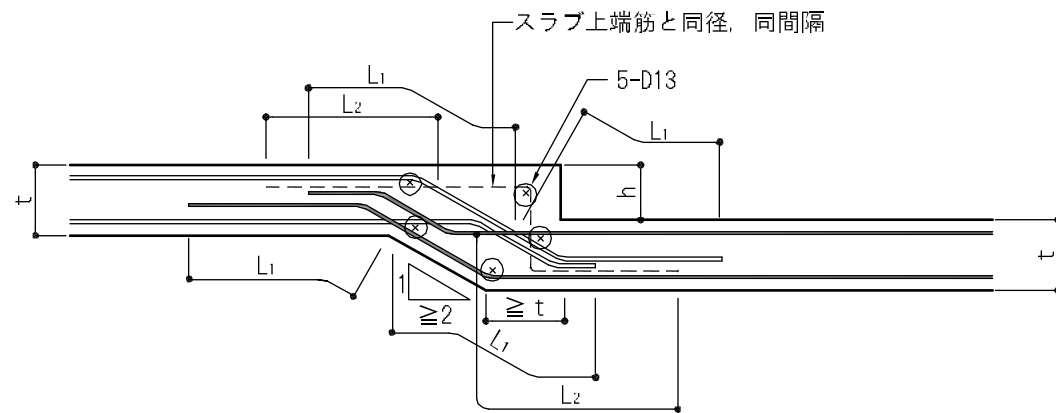
SW - 007

(d) スラブ段差部配筋要領 A

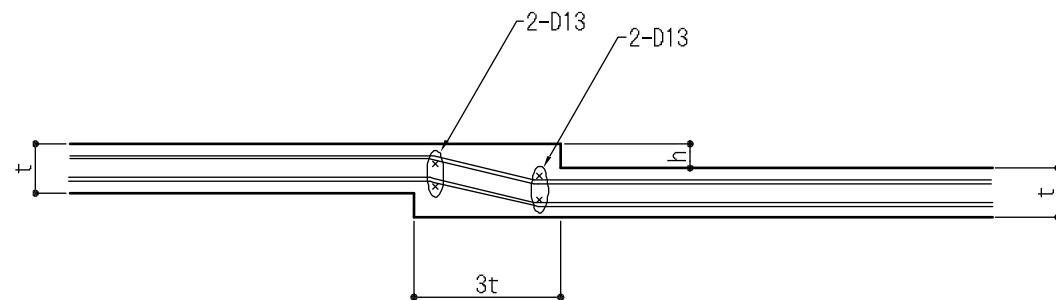
i) $h > t$ の場合 (但し, $h \leq 200\text{mm}$ とする)



ii) $t/2 < h \leq t$ の場合 (但し, $h \leq 150\text{mm}$ とし, $h > 150\text{mm}$ の場合は, i) による)



iii) $h \leq t/2$ の場合 (但し, $h > 70\text{mm}$ の場合は ii) による)



A スラブ段差が $h > 150\text{mm}$ となる場合については, 原則として小梁を設けて処理を行なう。それが不可能な場合のみ, 本図によって処理してもよい。

仕
様

附
記
事
項

改
訂
事
項

名
称

縮
尺

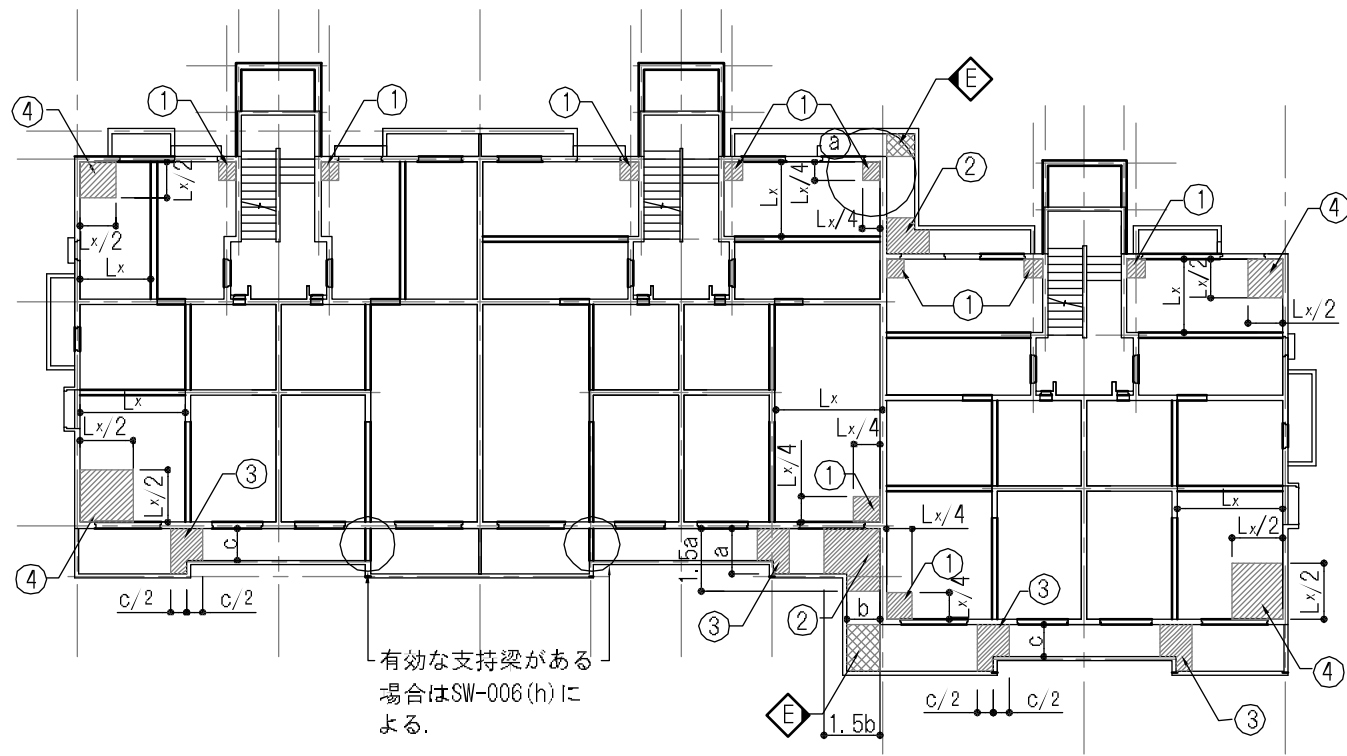
・段差の区分及び配筋方法の改定。

スラブ配筋標準(6)

SW - 008

6) スラブ出隅部・入隅部補強要領

補強範囲の上端筋および下端筋の間隔が $\diamond A$ 100mm以下の場合、補強筋は不要とする。



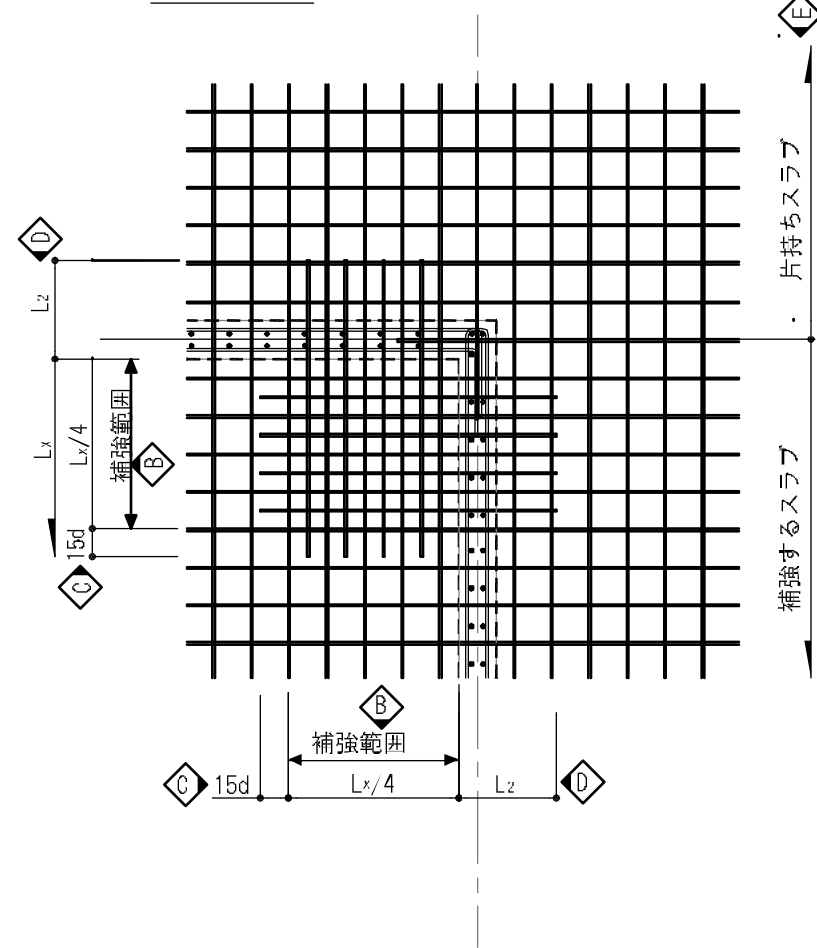
有効な支持梁がある場合はSW-006 (h) による。

下記スラブ各部分の上端・下端には補強筋を配する。

- ①：建物の出隅部
- ②：廊下・バルコニー入隅部
- ③：廊下・バルコニー形状変形部
- ④：建物の四隅部分（この部分のみ配筋の範囲が広いことに注意）

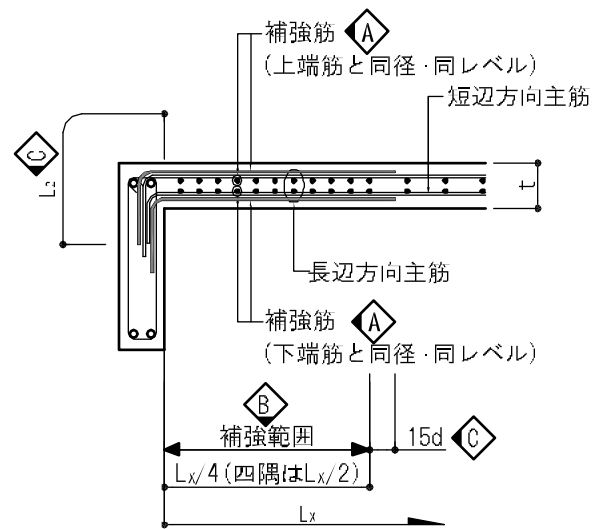
(a) 補強要領：建物出隅部 $\diamond F$

(a) 部詳細図

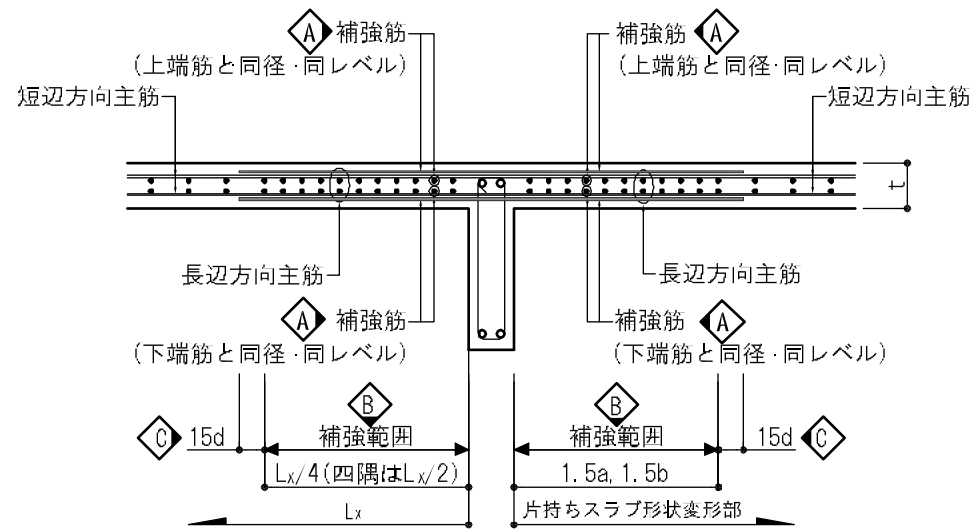


(b) 補強筋定着要領：出隅・入隅部の補強

i) スラブが連続していない場合

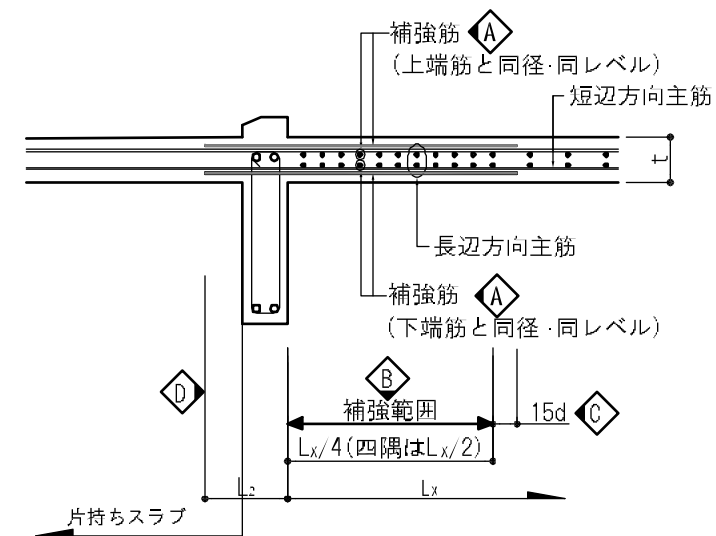


ii) スラブが連続している場合



iii) バルコニー等が取付いている場合

* スラブに段差のある場合も同様な定着方法とする。



- $\diamond A$ 建物の四隅・スラブの出隅・入隅部・および形状の変化する部分は、長辺方向・短辺方向共に、スラブの上端・下端筋と同径の補強筋を各配筋と同レベルで追加する。ただし、設計図における配筋間隔が100mm以下の場合、補強は不要とする。
- $\diamond B$ 補強範囲は建物の四隅においては、スラブ短辺長さの1/2、その他の部分は1/4とする。片持ちスラブ部分は本図に表示する範囲とする。
- $\diamond C$ 補強筋の末端部はスラブ筋と同様の15d以上の余長を確保する。
- $\diamond D$ バルコニーに段差がなく、隣接スラブ内に定着できる場合は、鉄筋を延長してもよい。
- $\diamond E$ バルコニー出隅部については、SW-006 (g)を参照のこと。
- $\diamond F$ SW-007 に示す開口補強筋と出隅部・入隅部・形状変形部の補強筋が同位置となる場合は、SW-007の補強筋を優先して配筋を行なう。

仕
様

附
記
事
項

改
訂
事
項

名
称

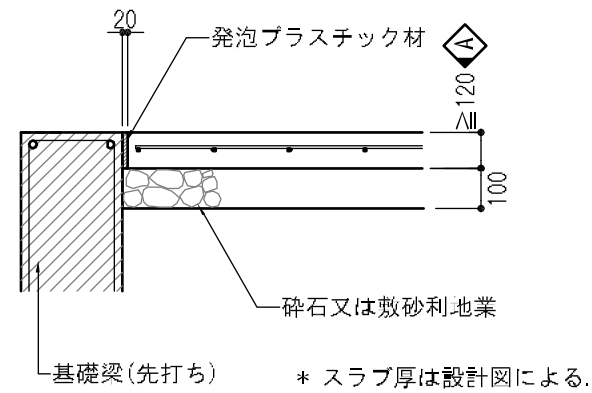
スラブ配筋標準(7)

縮
尺

SW - 009

7) 1階スラブ(土間コンクリートスラブ, 後打ちスラブ)配筋要領

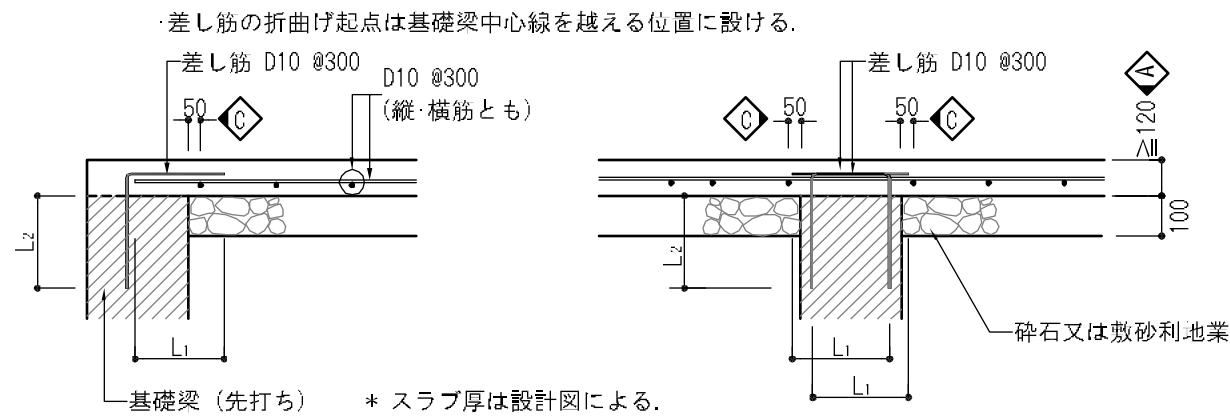
(a) 土間コンクリートを基礎梁から切離す場合



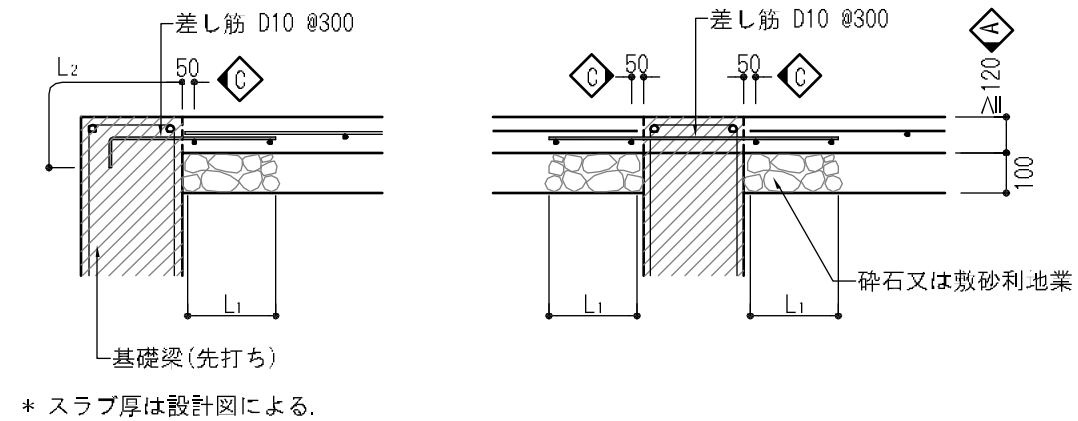
(b) 土間コンクリート配筋, 差し筋

i) 土間コンクリートを基礎梁と一体にする場合

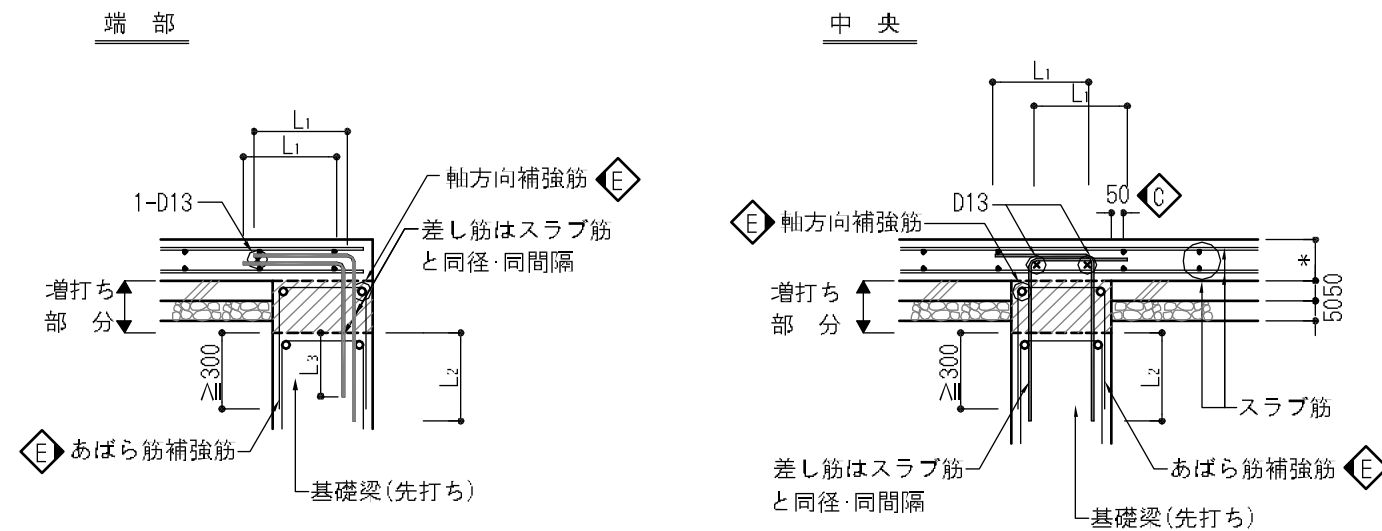
註) 基礎梁上部に耐力壁が取り付けられる場合の差し筋の径および間隔は, 設計図による。



ii) 基礎梁天端と土間コンクリート天端が同レベルの場合



(c) 1階後打ちスラブ差し筋配筋要領



- ◇A 土間コンクリートスラブ厚は $t=120\text{mm}$ 以上とする。ただし, 設計図に特記ある場合はその値による。
- ◇B 土間コンクリート天端と基礎梁天端が同レベルとなると, 差し筋が型わくを貫通することになるので, 可能な限り置きスラブとする。
- ◇C スラブ筋の初めの鉄筋は梁面より 50mm の位置に配するものとする。
- ◇D スラブ下にふかしのない場合の配筋要領は, SW-004による。
- ◇E 基礎梁の増打ち部補強筋は SW-108による。

仕

様

附記事項

改訂事項

名称

縮尺

・本図面追加

スラブ配筋標準(8)

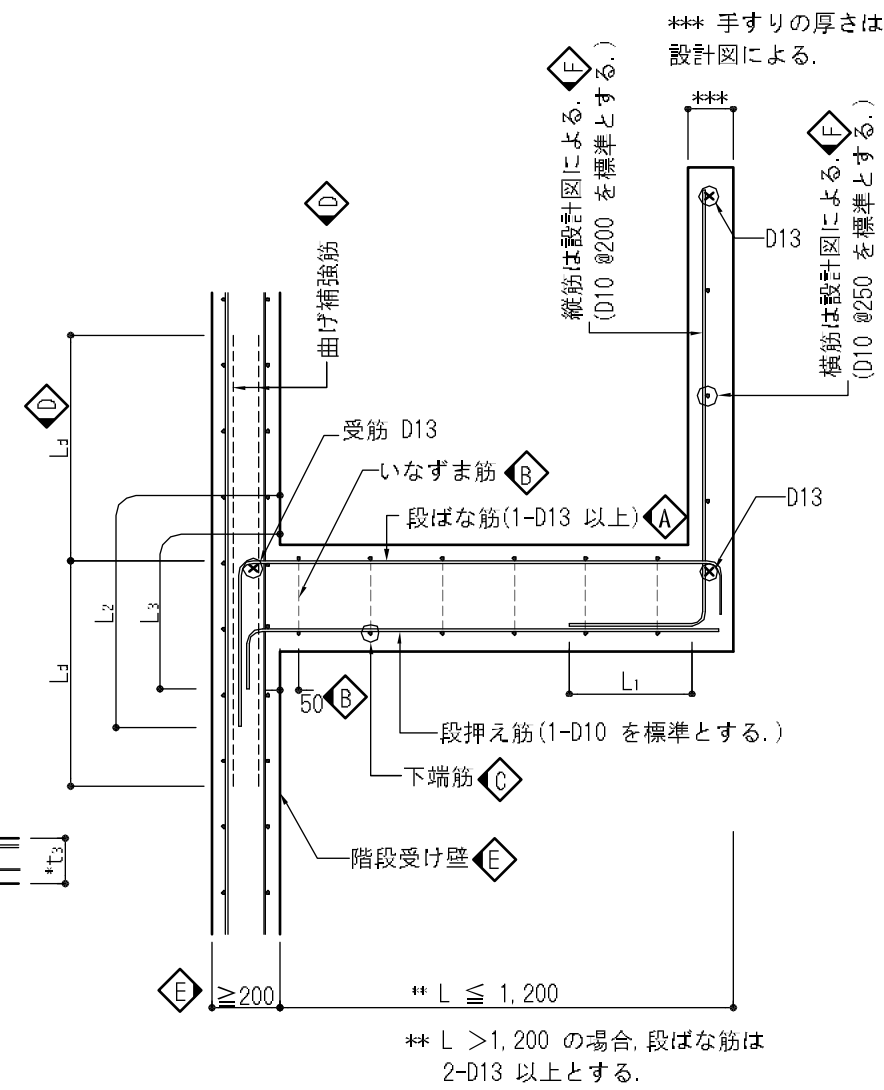
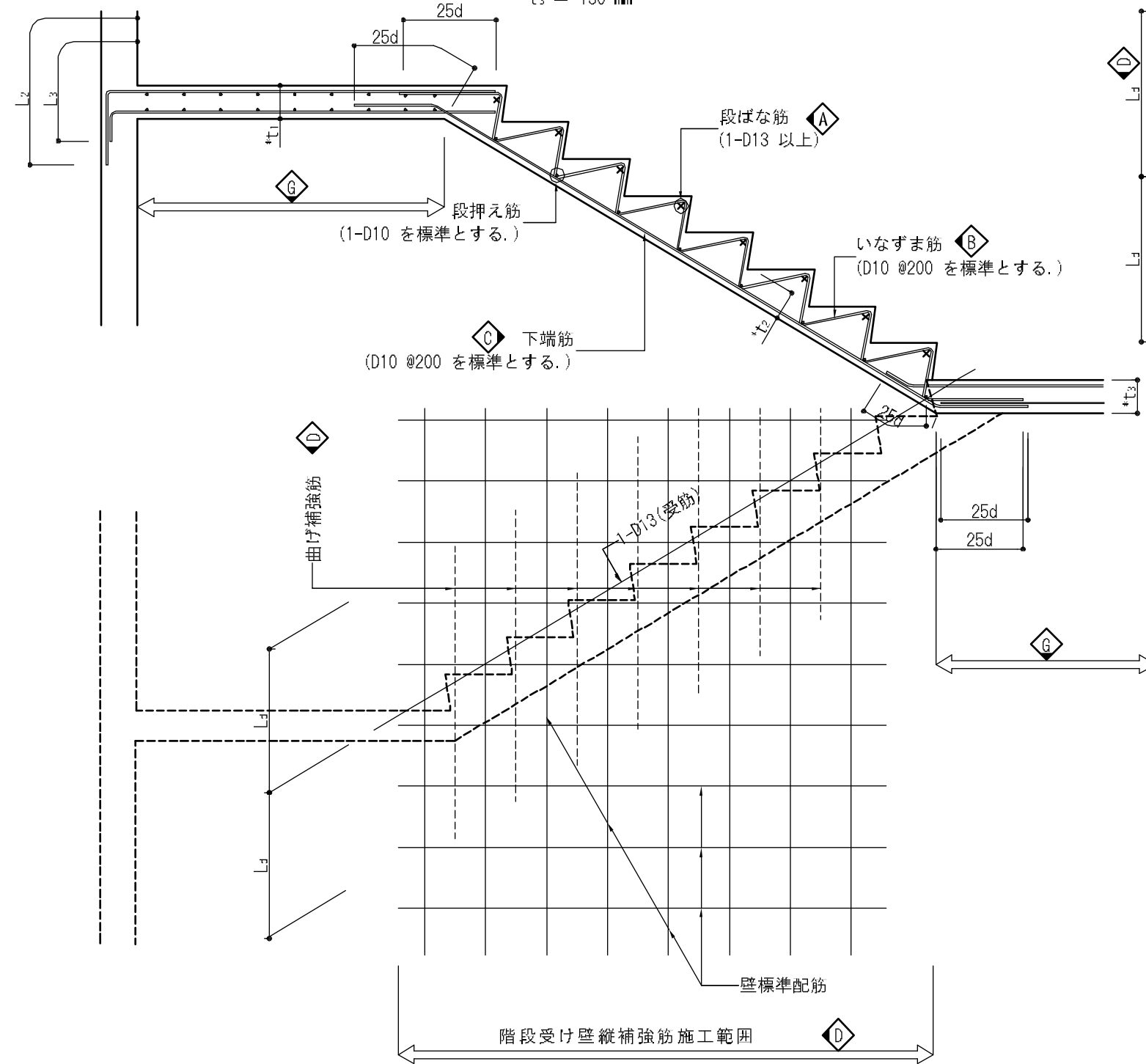
SW-010

階段配筋標準

1) 片持ち階段の配筋 【住棟内】

* スラブ厚 $t_1 \sim t_3$ については設計図によるほか、下記の数値以上とする。

- $t_1 = 130 \text{ mm}$
- $t_2 = 90 \text{ mm}$
- $t_3 = 130 \text{ mm}$



** $L \leq 1,200$
 ** $L > 1,200$ の場合、段ばな筋は 2-D13 以上とする。

仕
様

- ◇ A 段ばな筋は設計図によるほか、1-D13 以上とする。
- ◇ B いならず筋は D10 @200 を標準とし、階段受け壁面より 50mm の位置に第一いならず筋を配筋する。
- ◇ C 下端筋は D10 @200 を標準とする。(間隔は、いならず筋と同じとし、いならず筋に添えて配筋する。)
- ◇ D 片持ち階段受け壁に設ける段床の曲げ補強筋の有無、およびその定着長さ L_1 は設計図による。
- ◇ E 階段受けの壁の厚さは 200mm 以上とする。屋外階段受け壁の配筋については SR-014 を参照する。
- ◇ F 階段手すりの配筋要領は片持ちスラブの先端の手すりの配筋要領 (SW-006) に準ずる。
- ◇ G 踊り場のスラブは三辺固定スラブまたは二辺固定スラブとして計算した上で、もちあみ配筋を行なうものとする。

附
記
事
項

改
訂
事
項

- ・ 階段部いならず筋および下端筋の定着長さを改定

名
称

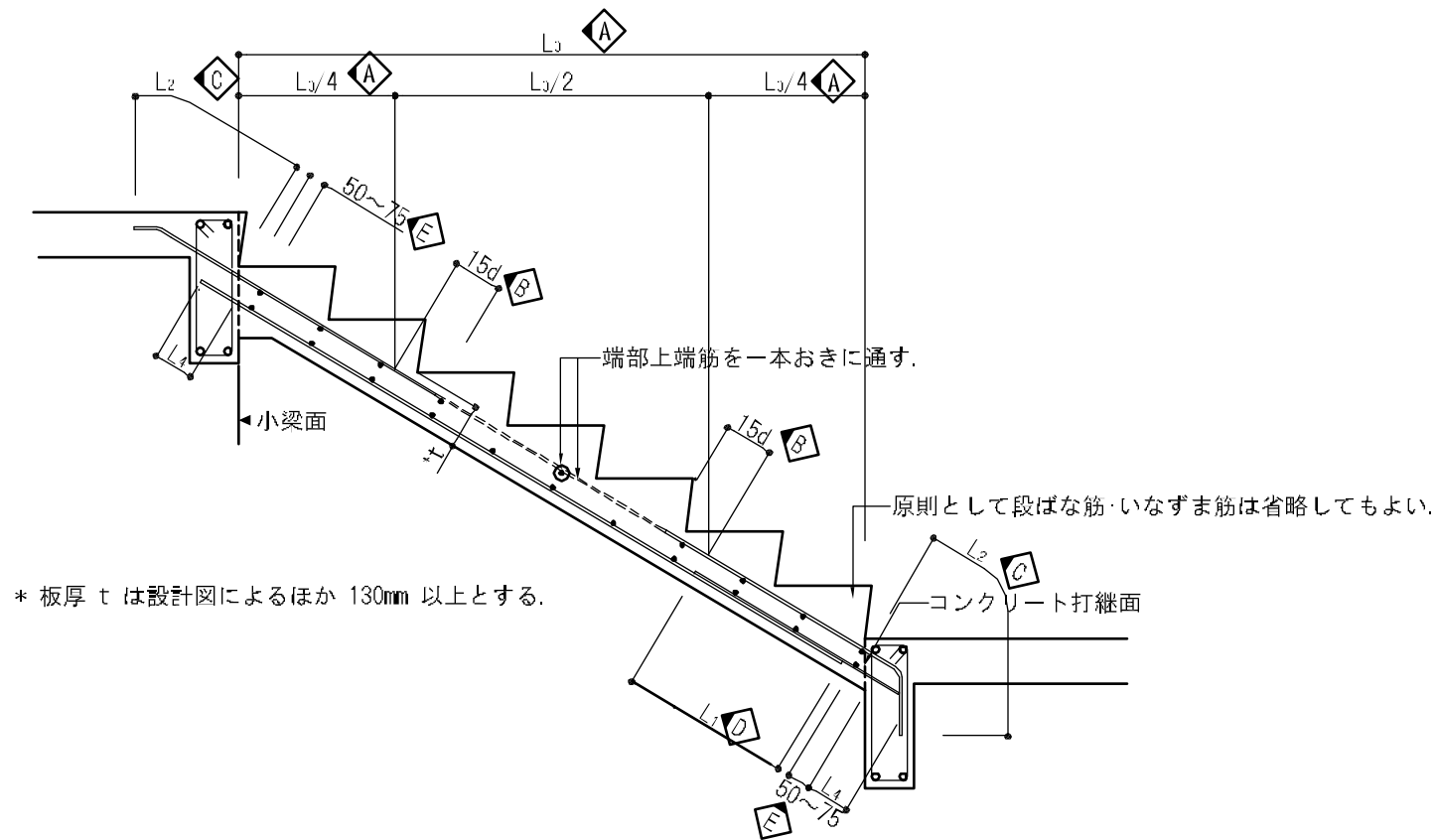
階段配筋標準 (1)

縮
尺

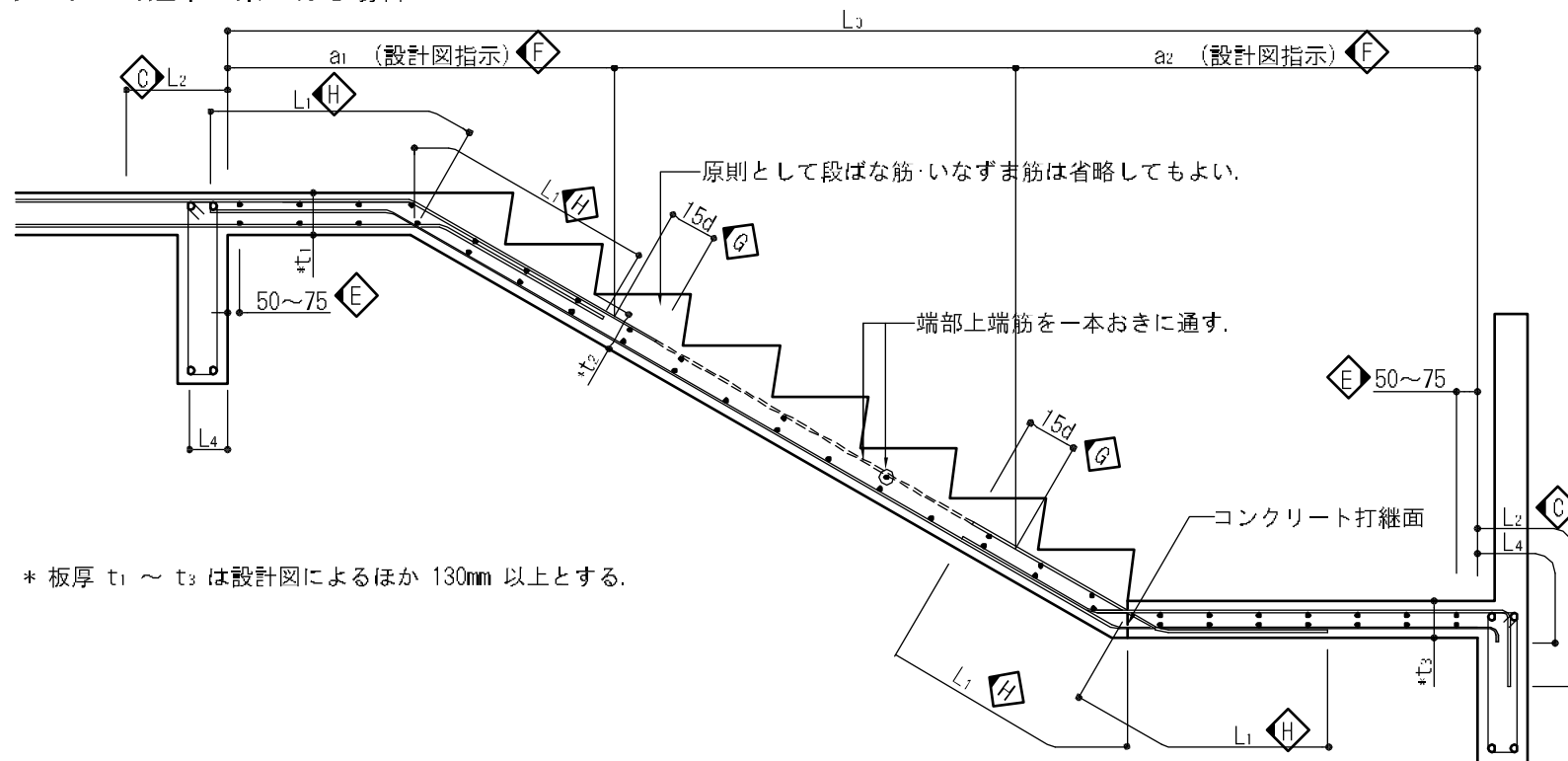
SW - 011

2) スラブ階段の配筋

(a) 階段の両側に小梁のある場合



(b) 折曲がりスラブで途中に梁のある場合



- ◇ A 主筋の端部、中央の区分線は階段内のリスパン L_3 の $1/4$ の点とする。(通常のスラブと同様である。)
- ◇ B 端部カットオフ筋の余長は $L_3/4$ の点より $15d$ 以上とする。
- ◇ C 端部上端主筋は隣接するスラブ内、または梁に十分定着させること。定着長は L_2 以上とする。
- ◇ D 継手区間は $L_3/4$ の区間内とする。コンクリート打継面があるので注意すること。
- ◇ E 配力筋の端部鉄筋位置を示す。配力筋はこの位置から割り付ける。
- ◇ F 主筋の端部、中央の区分線は設計図によるものとする。
- ◇ G 端部の上端筋の余長は区分線より $15d$ 以上とする。
- ◇ H 折曲り点において、上端・下端筋とも重ね継手長さ L_1 を確保し、各スラブ鉄筋と連続させる。

仕様

附記事項

改訂事項

名称

縮尺

階段配筋標準 (2)

SW - 012

設計かぶり厚さ一覧

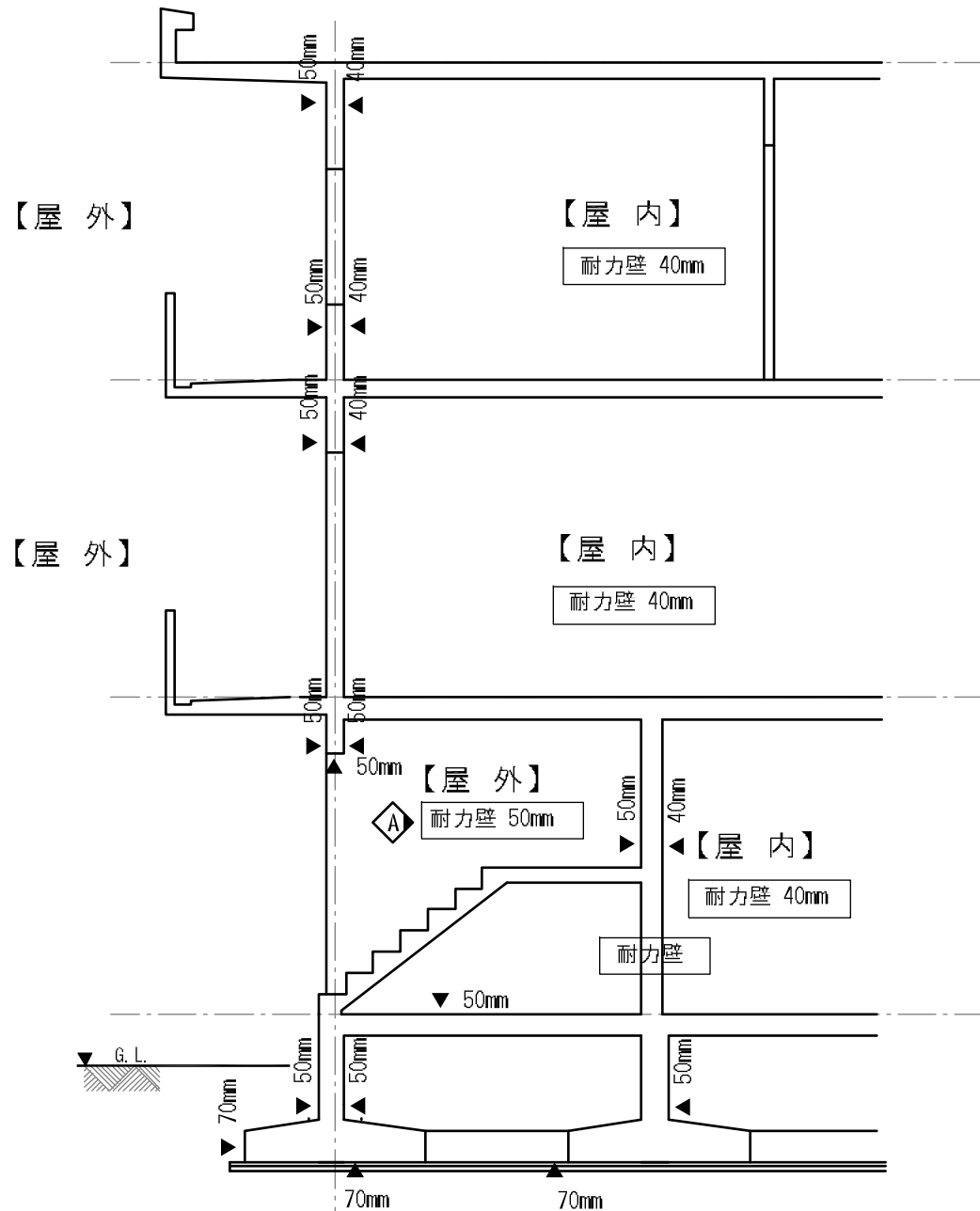
耐力壁

註：屋外に面している場合でもタイル貼り, 又はモルタル塗り仕上げなど耐久性上有効な仕上げのある場合は, 50mm を40mmに読み替えてよい。

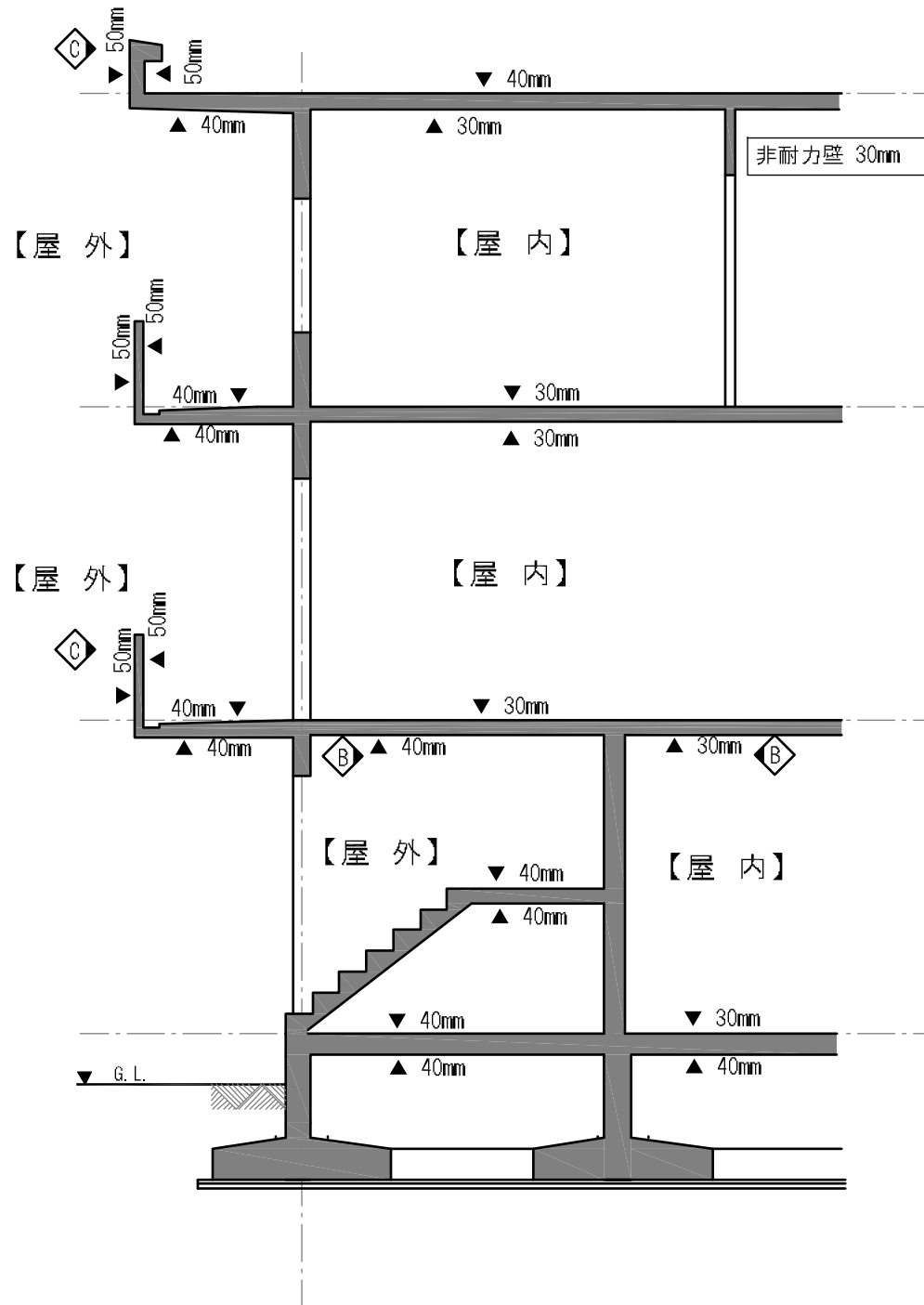
スラブ・非耐力壁

壁

註：屋外に面している場合でもタイル貼り, 又はモルタル塗り仕上げなど耐久性上有効な仕上げのある場合は, 40mm を 30mmに読み替えてよい。



壁の幅止め筋は, 防錆処理を行うことを原則とし, 本図に示す設計かぶり厚さの測定対象とはしていない。ただし, 幅止め筋からのかぶり厚さが上図に記載の必要最小限のかぶり厚さを満足する場合には防錆処理(溶融亜鉛めっき等)の必要はない。



- ◇A 耐力壁縦・横筋のかぶり厚さは, 外部に面する場合は 50mm であるが, この値は増打ち厚さを含んだ数値としてよい。
- ◇B 1枚のスラブが, 屋外と屋内とに面する場合には, かぶり厚さが異なってくるため配筋上は厚い方のかぶりを確保しなければならないので注意。
- ◇C 手すり, パラベットの鉄筋のかぶり厚さは, 一般の非耐力壁とは異なるので注意。

仕様

附記事項

改訂事項

名称

縮尺

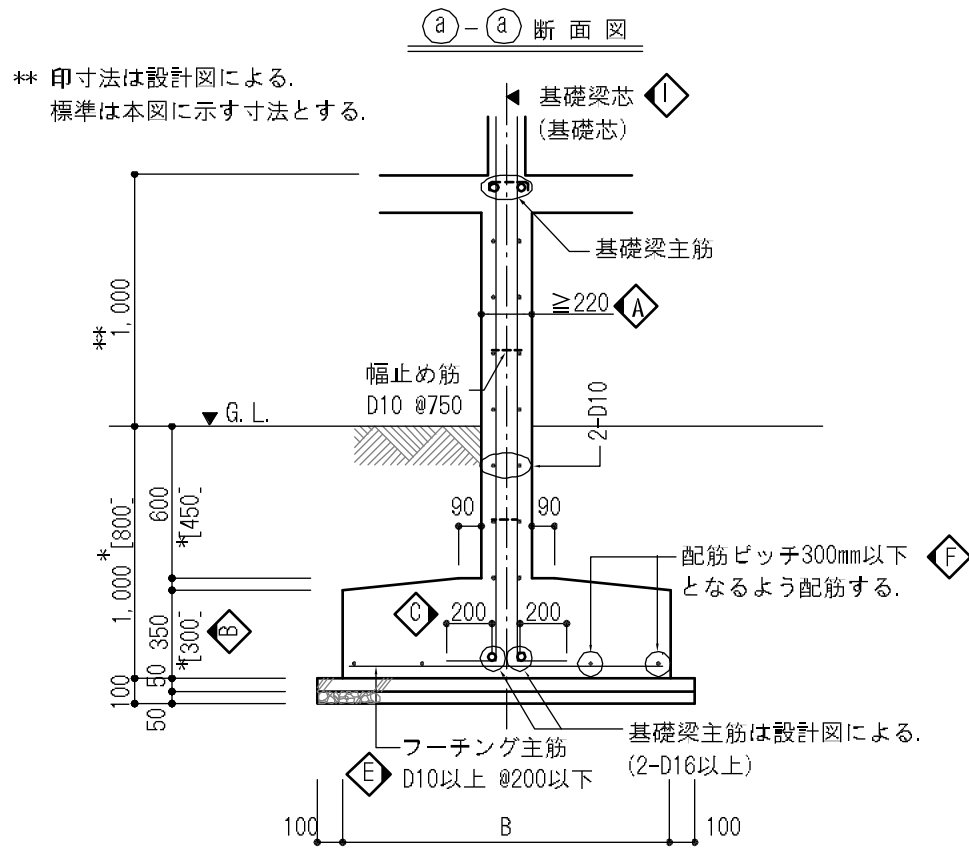
- ・フーチング立上り部のかぶり厚さを70mmに修正
- ・幅止め筋の防錆処理が不要となる条件を追加

設計かぶり厚さ一覧

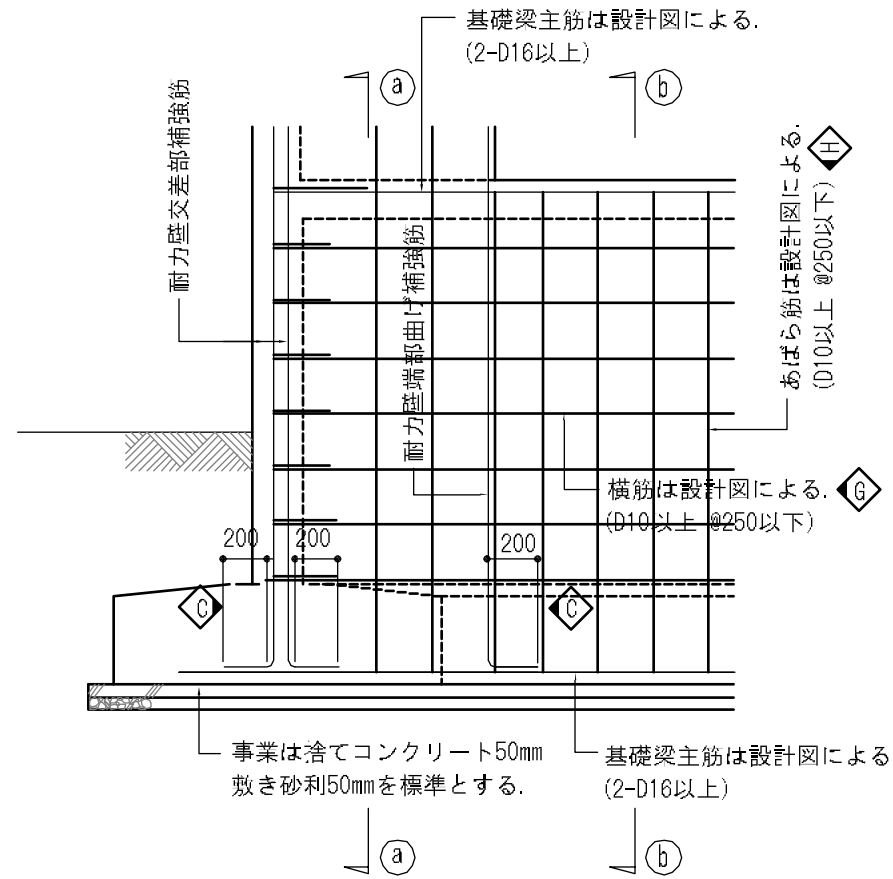
SW - 013

基礎廻り標準図

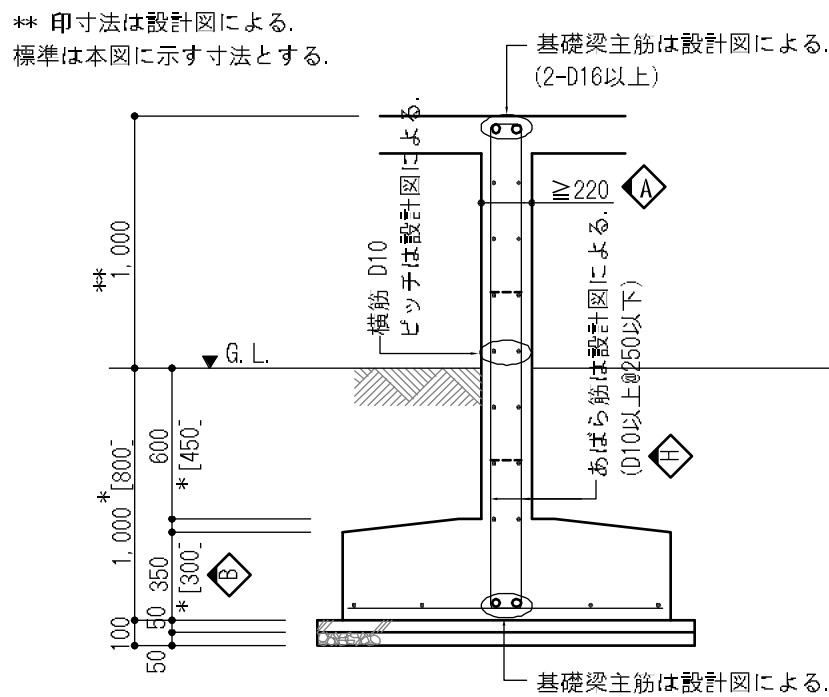
1) 直接基礎



*]内寸法は3階建て以下の場合を示す。

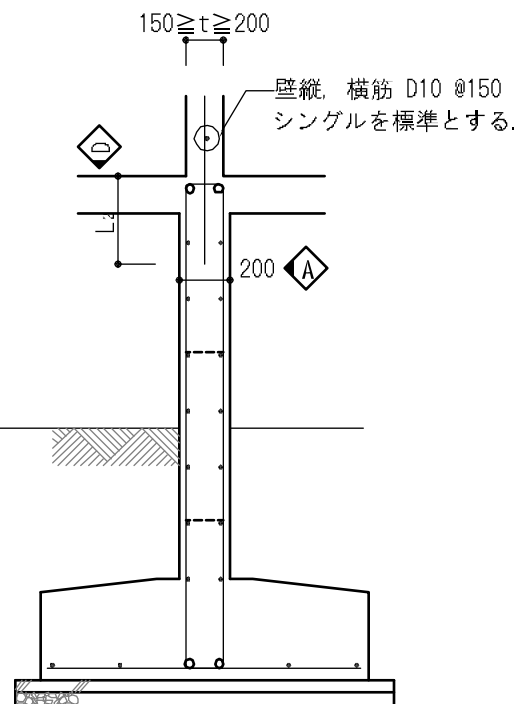


(b)-(b) 断面図



*]内寸法は3階建ての場合を示す。 (2-D16以上)

当配筋の場合の鉄筋納まり



仕
様

- A** 基礎梁の幅は壁厚 +20mm、かつ単配筋の場合200mm、複配筋の場合220mm以上とする。
- B** フーチングのせいは、下記の値程度を目安とする。

	先端	元端
3階建	300mm	350mm
4・5階建	350mm	400mm
- C** 耐震壁の交差部補強筋、壁端部曲げ補強筋は、基礎下端まで延長し曲込み余長 200mmを確保する。
- D** W150 の縦筋は基礎梁内に L_2 の定着長をとるものとする。
- E** フーチング主筋は、D10 以上 @200 以下の配筋量とする。
- F** フーチングの配力筋は、D10 以上 @300 以下の配筋とし、端部に D10 を配する。
- G** 基礎梁の横筋は設計図によるほか、D10 以上 @250 以下の配筋とする。端部においては直交壁に L_2 の定着長をとる。
- H** あばら筋は設計図によるほか、D10 以上 @250 以下の配筋量を標準とする。
- I** 基礎梁芯は、原則として基礎芯と一致させる。

附
記
事
項

改
訂
事
項

名
称

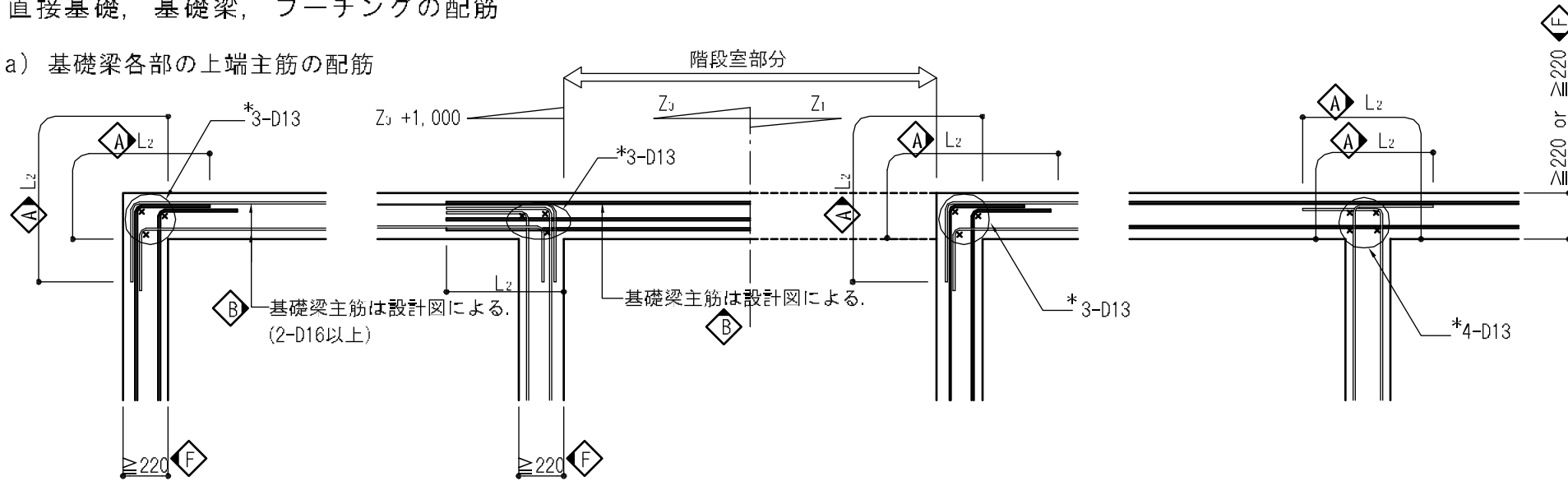
基礎廻り詳細図(1)

縮
尺

SW - 100

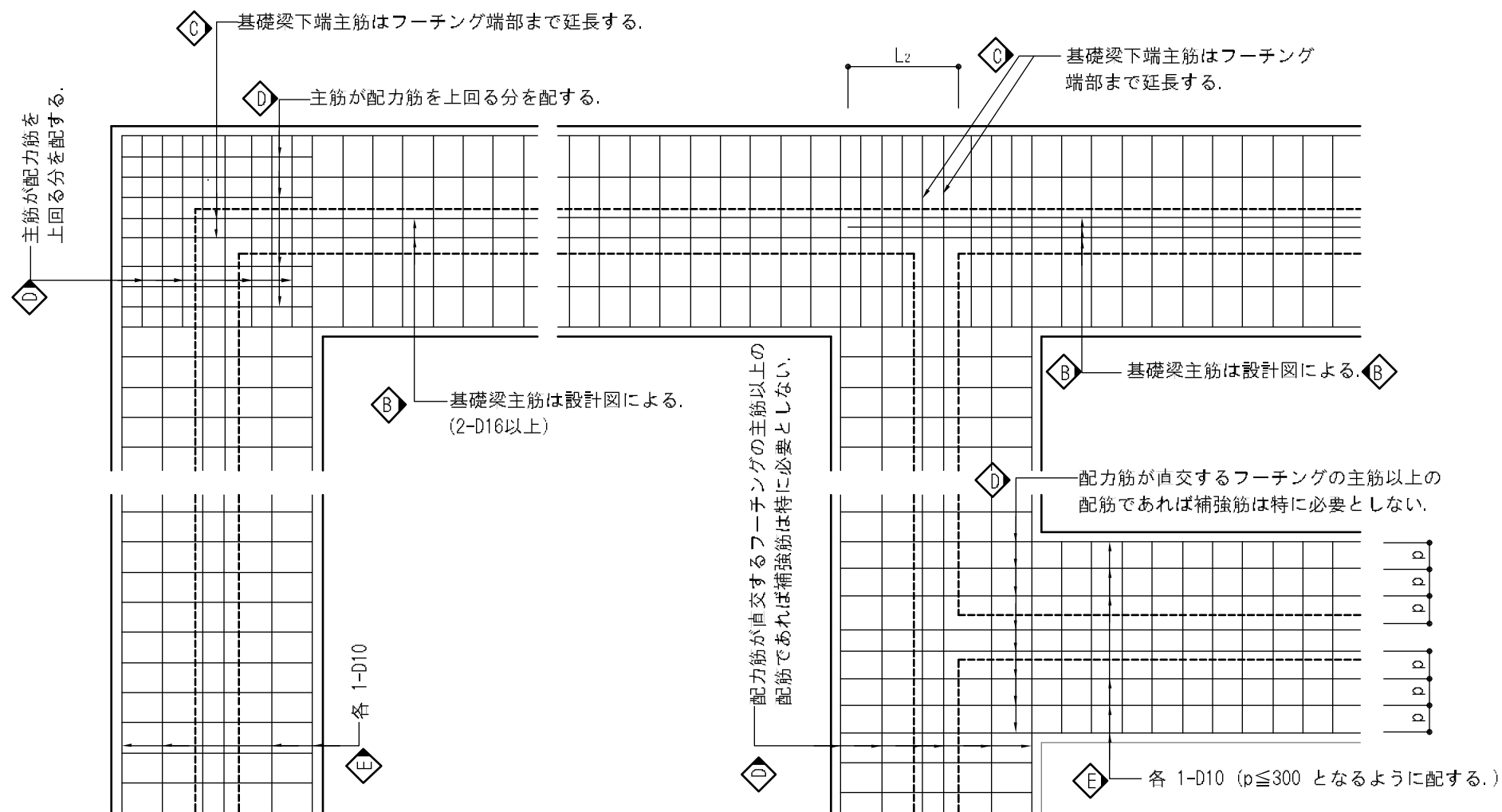
2) 直接基礎, 基礎梁, フーチングの配筋

(a) 基礎梁各部の上端主筋の配筋



* 隅角部および壁交差部の曲げ補強筋は設計図によるほか、壁の配筋要領の表示による。

(b) フーチングの配筋



- ◇ A 基礎梁上端筋は直交梁内に L_2 定着する。斜め定着も可とする。
- ◇ B 基礎梁上端筋は設計図によるほか、2-D16 以上の配筋量を確保すること。
- ◇ C 基礎梁下端筋は直交梁に定着せず、フーチング端部まで延長し定着する。
- ◇ D フーチング交差部において、主筋が配力筋を上回る配筋となる場合については、不足分を主筋方向に追加配筋する。配力筋が主筋の配筋以上である場合は、この補強は必要ない。
- ◇ E フーチングの配力筋は端部に D10 を配し、配力筋ピッチが 300mm 以下となるよう D10 を配筋する。
- ◇ F 上部の耐力壁が単配筋の場合の基礎梁幅は 200mm 以上、複配筋の場合は 220mm 以上とする。

仕

様

附記事項

改訂事項

名称

縮尺

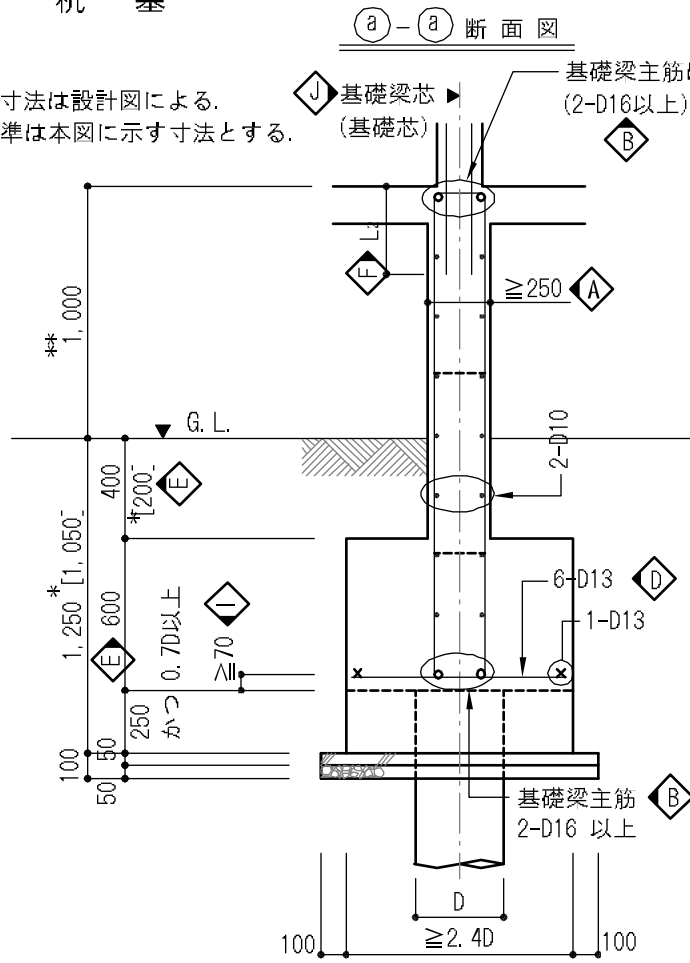
◇ 階段室部分の特記を削除

基礎廻り詳細図(2)

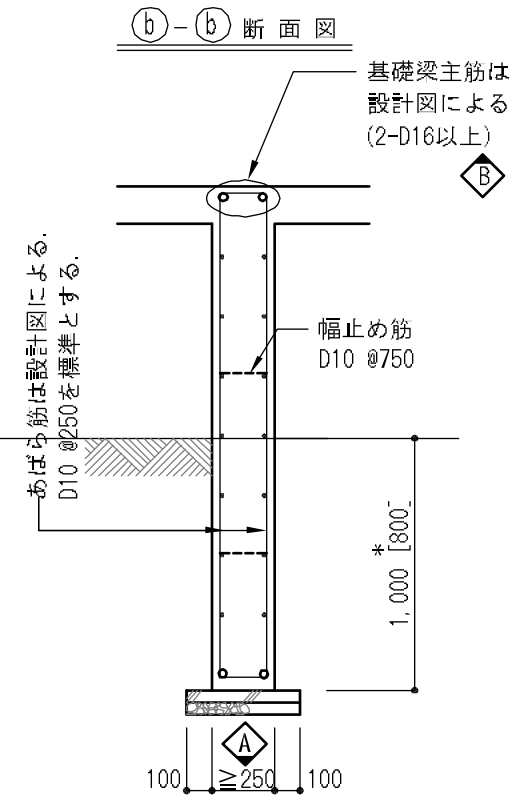
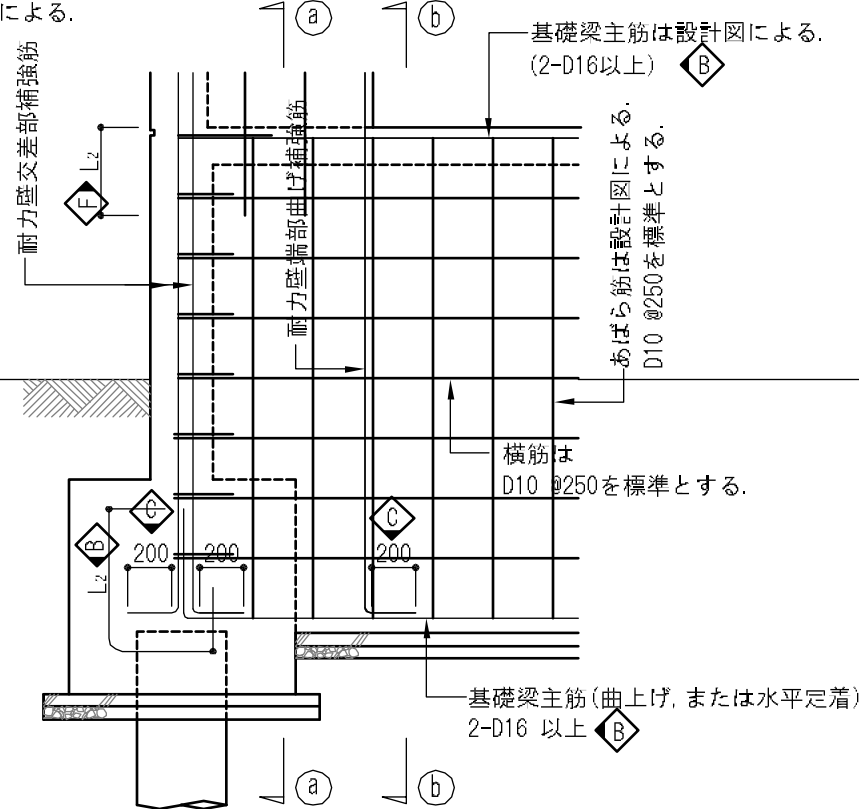
SW - 101

3) 杭基礎

** 寸法は設計図による。標準は本図に示す寸法とする。

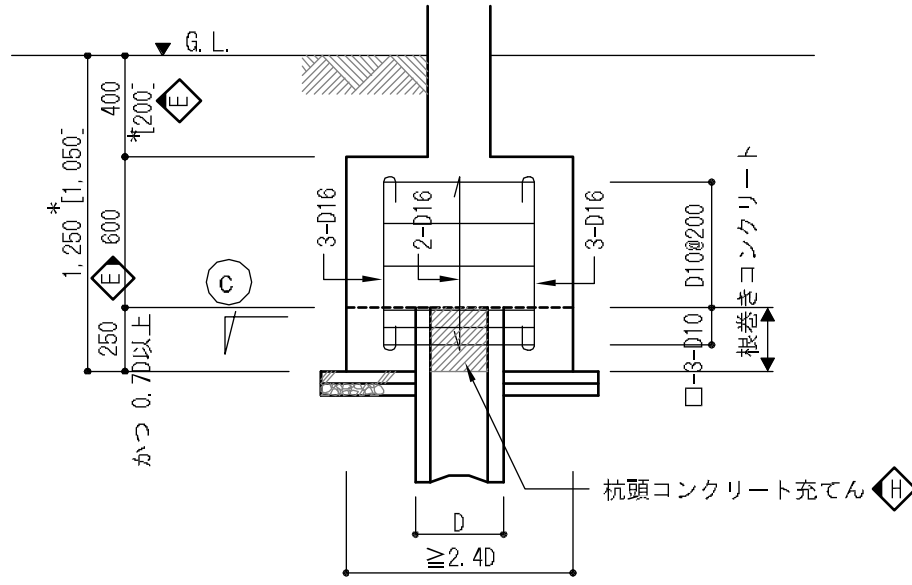


*]内寸法は3階建て以下の場合を示す。



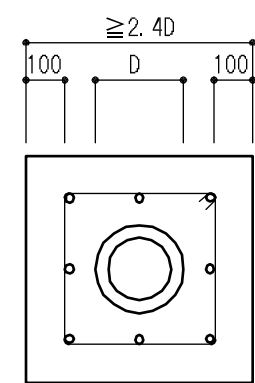
*]内寸法は3階建ての場合を示す。

杭頭補強筋配筋要領



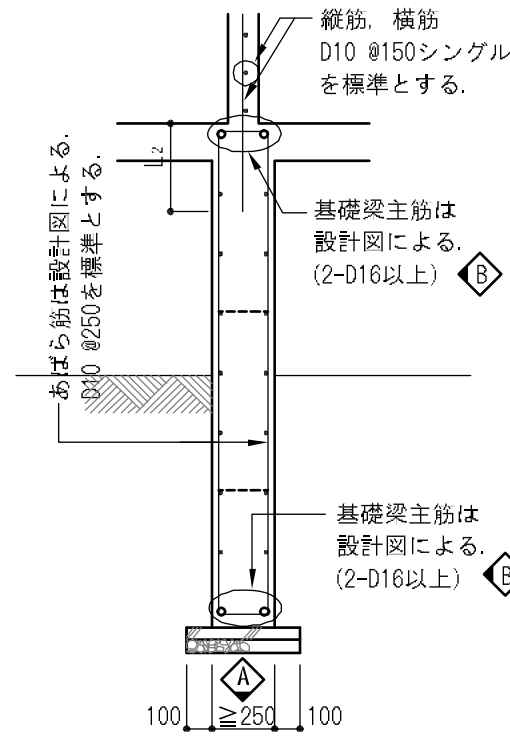
*]内寸法は3階建て以下の場合を示す。

(c)-(c) 断面図



主筋 8-D16
フープ D10 @ 200

W150 縦筋の納まり



仕様

- ◇A 基礎梁の幅は上部耐力壁の厚さ以上、かつ 250mm 以上とする。
- ◇B 基礎梁の主筋は設計図によるほか、2-D16 以上の配筋量とする。上端筋は直交梁に L_2 定着し、下端筋は直交梁に L_2 定着するか、曲上げ定着とする。
- ◇C 耐力壁隅角部補強筋および耐力壁端部曲げ補強筋は基礎下端まで延長し、曲込み余長 200mm を確保する。
- ◇D パイルキャップ主筋は 6-D13 以上とする。
- ◇E パイルキャップせいは 600mm とし、パイルキャップ上端の G.L. よりの下がり寸法は 3 階建てで 200mm、4・5 階建てで 400mm とする。
- ◇F 壁縦筋は基礎梁内に定着し、その定着長さは L_2 とする。なお、基礎下端まで延長し、余長 200mm を確保してもよい。
- ◇G 杭周辺の根巻き補強筋は 8-D16 とし、端部には 180° フックを設ける。帯筋は D10 @ 200 を配するものとする。
- ◇H 杭頭の補強としては、コンクリートを杭頭より根巻きコンクリート下端まで充てんするものとする。
- ◇I パイルキャップ下端筋は、スペーサー等により杭頭位置から 70mm 以上のかぶりを確保する。
- ◇J 基礎梁芯は、基礎芯と一致させる。

附記事項

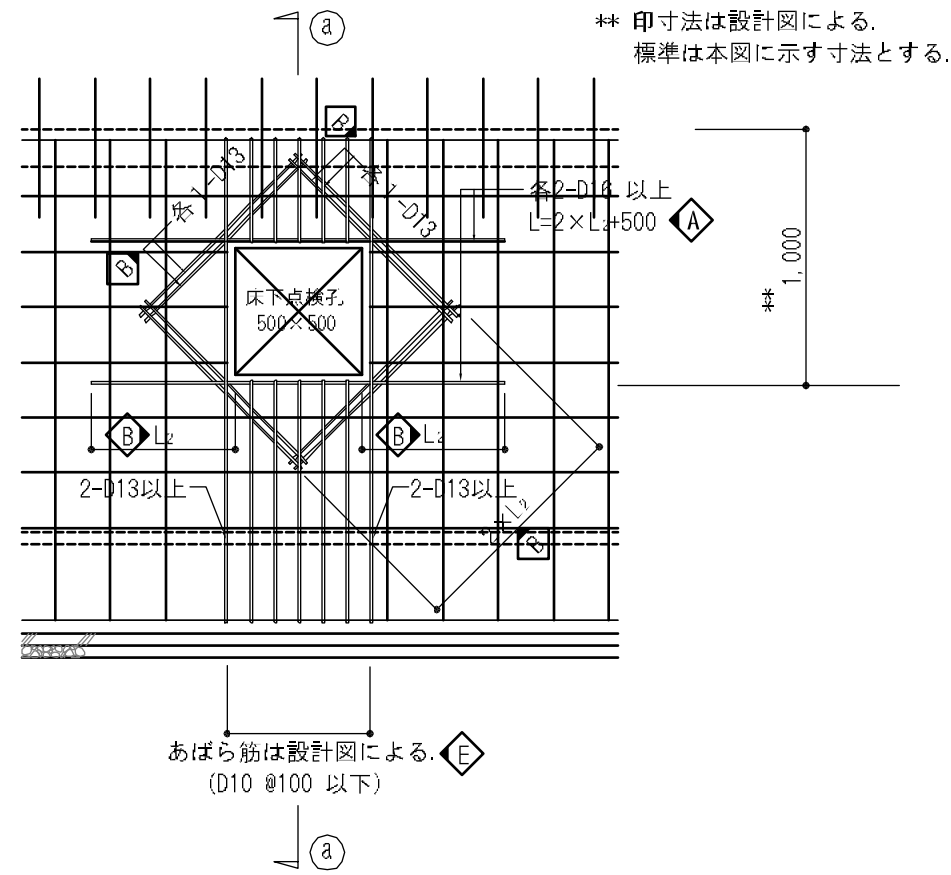
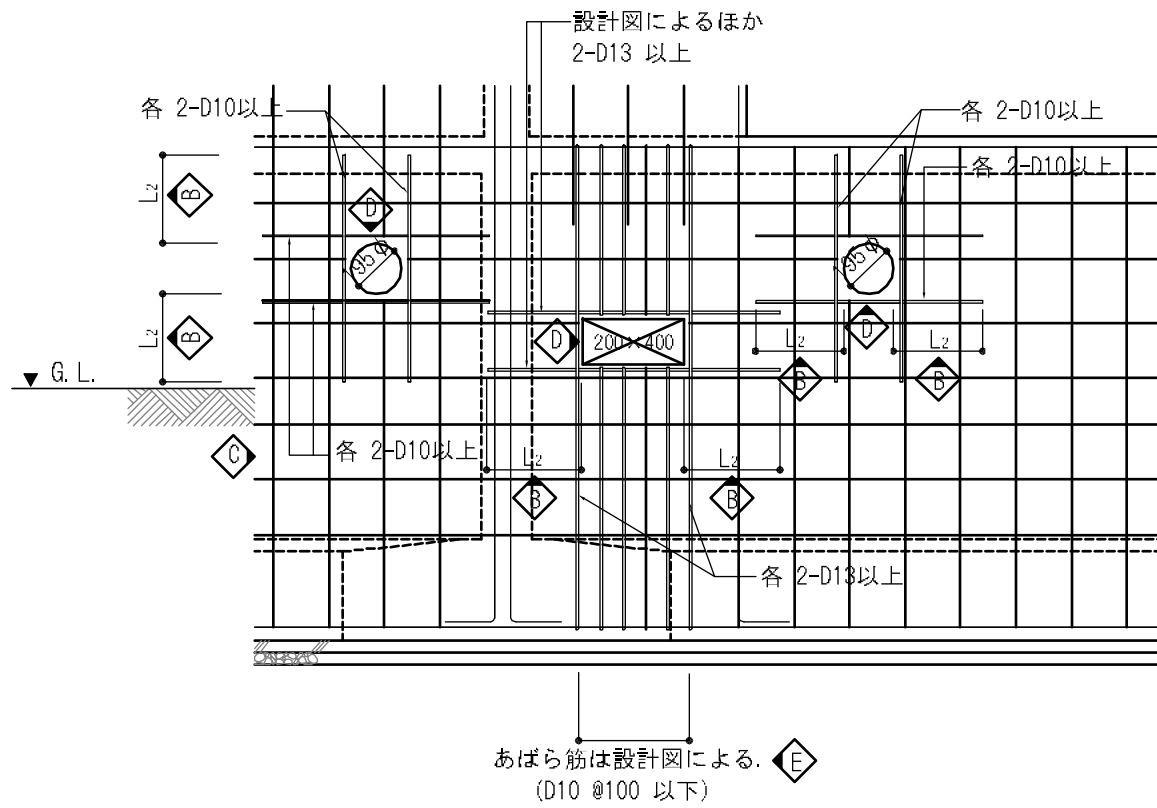
◇階段室部分の特記を削除し、下端筋の定着方法を改定

改訂事項

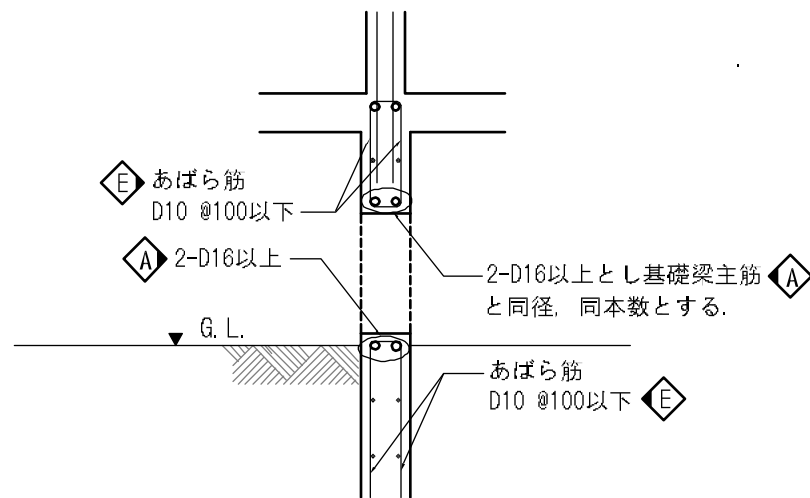
名称 基礎廻り詳細図(3)

縮尺 SW - 102

4) 床下換気孔, 点検孔配筋要領



①-① 断面図



- Ⓐ 床下点検孔の横筋の補強は基礎梁主筋と同径・同本数とする。
- Ⓑ 開口補強筋の定着長は開口面より L_2 とする。斜め補強筋は特記なき場合は 2-D13 とし、長さは $2 \times L_2$ とする。
- Ⓒ 横筋が切断されない場合は、横筋を開口部補強筋として使用してよい。
- Ⓓ 床下換気孔は1階スラブがPC板のときは G.L. ~ G.L. +500の間に、在来スラブの場合は、G.L. +500 ~ G.L. +700の間に設ける。補強筋は本図による。
- Ⓔ 床下点検孔および換気孔のあばら筋の径、間隔は設計図による。特記なき限りは D10 @100 以上の配筋量とする。

仕様

附記事項
 ・床下点検孔は壁下に設けることを原則とする。位置は梁端より開口幅以上はなした位置に設けることとする。

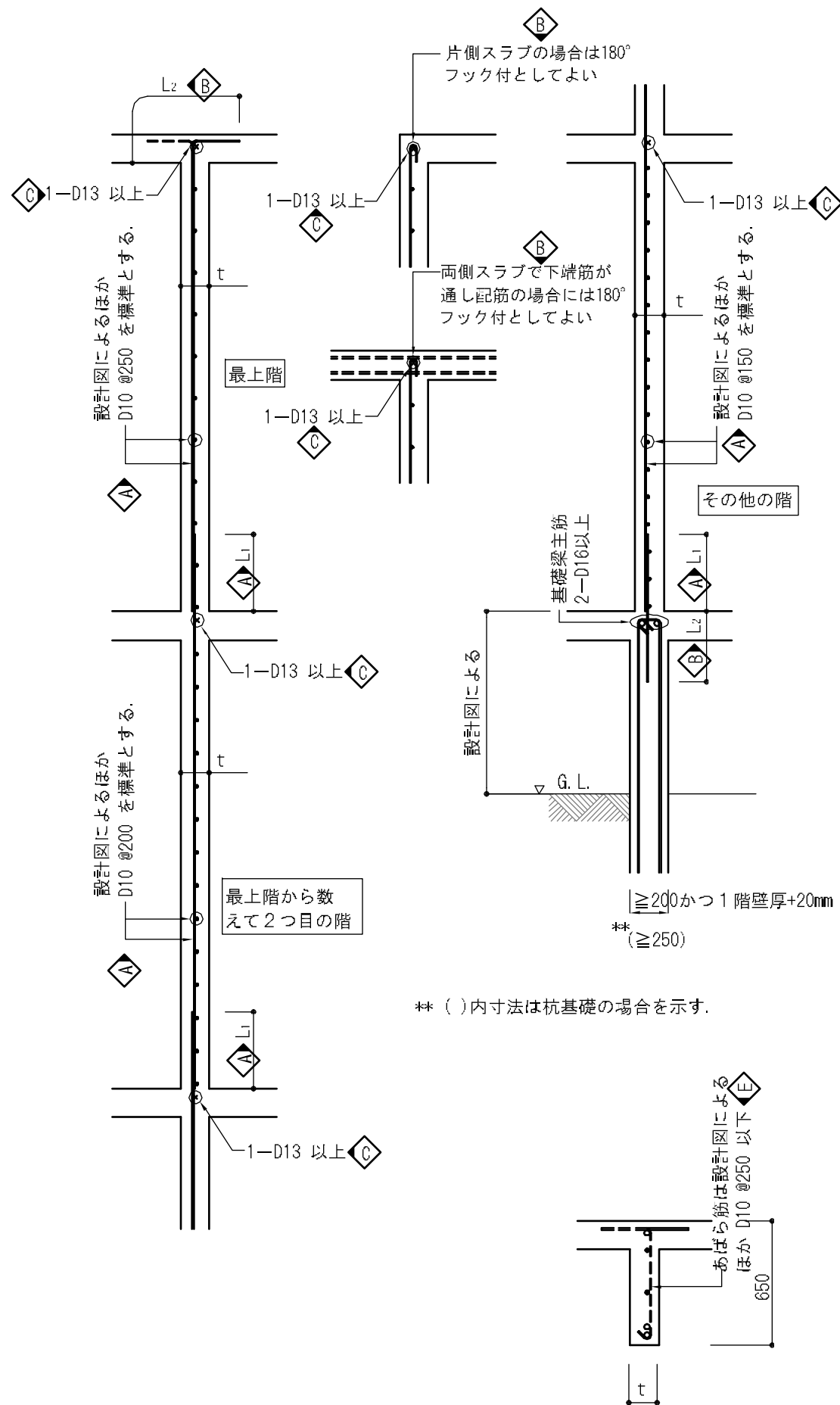
改訂事項

名称
 基礎廻り詳細図(4)

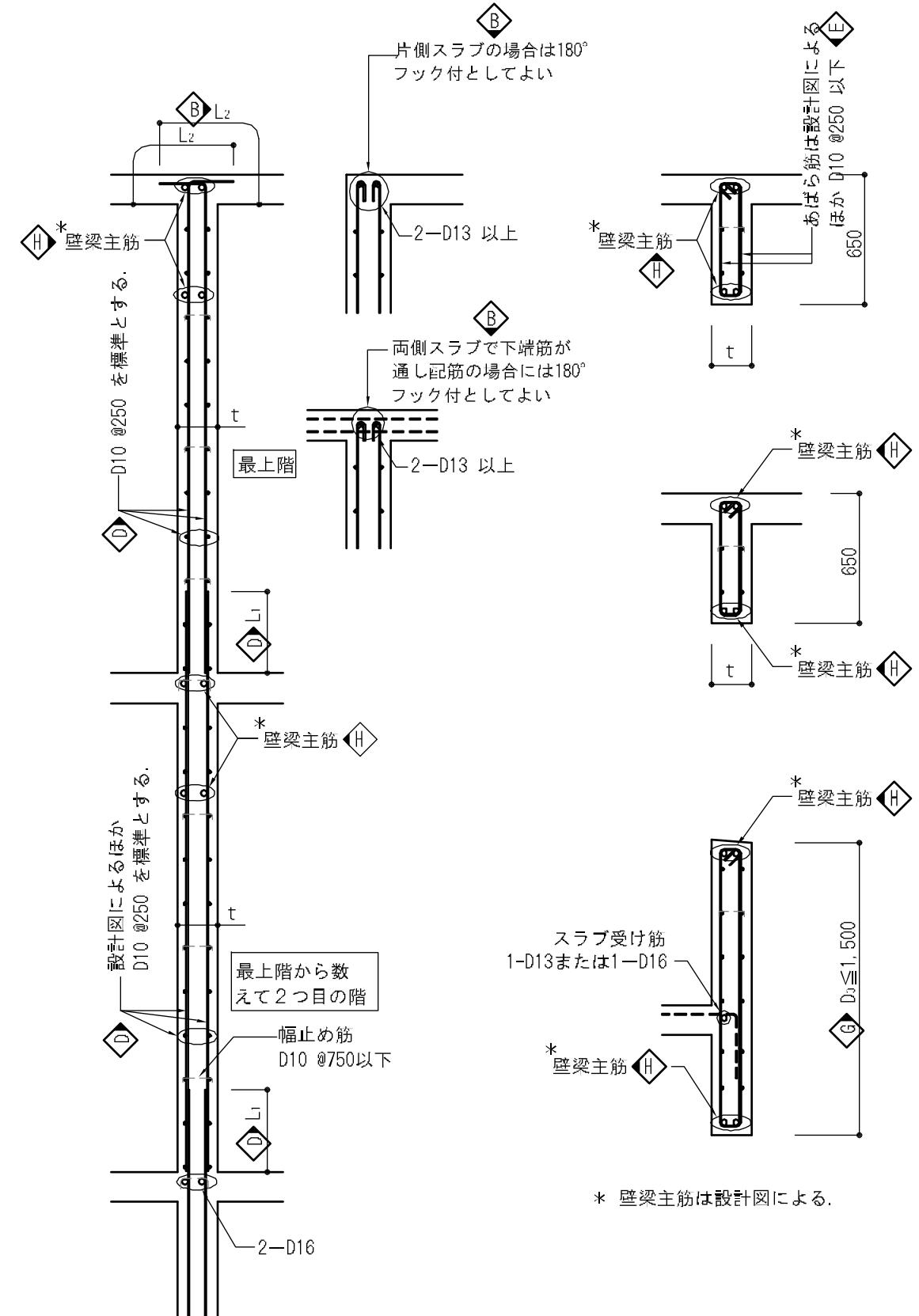
縮尺
 SW - 103

2) 耐力壁および壁梁配筋要領

(a) 耐力壁(単配筋)の配筋: $t \leq 200$



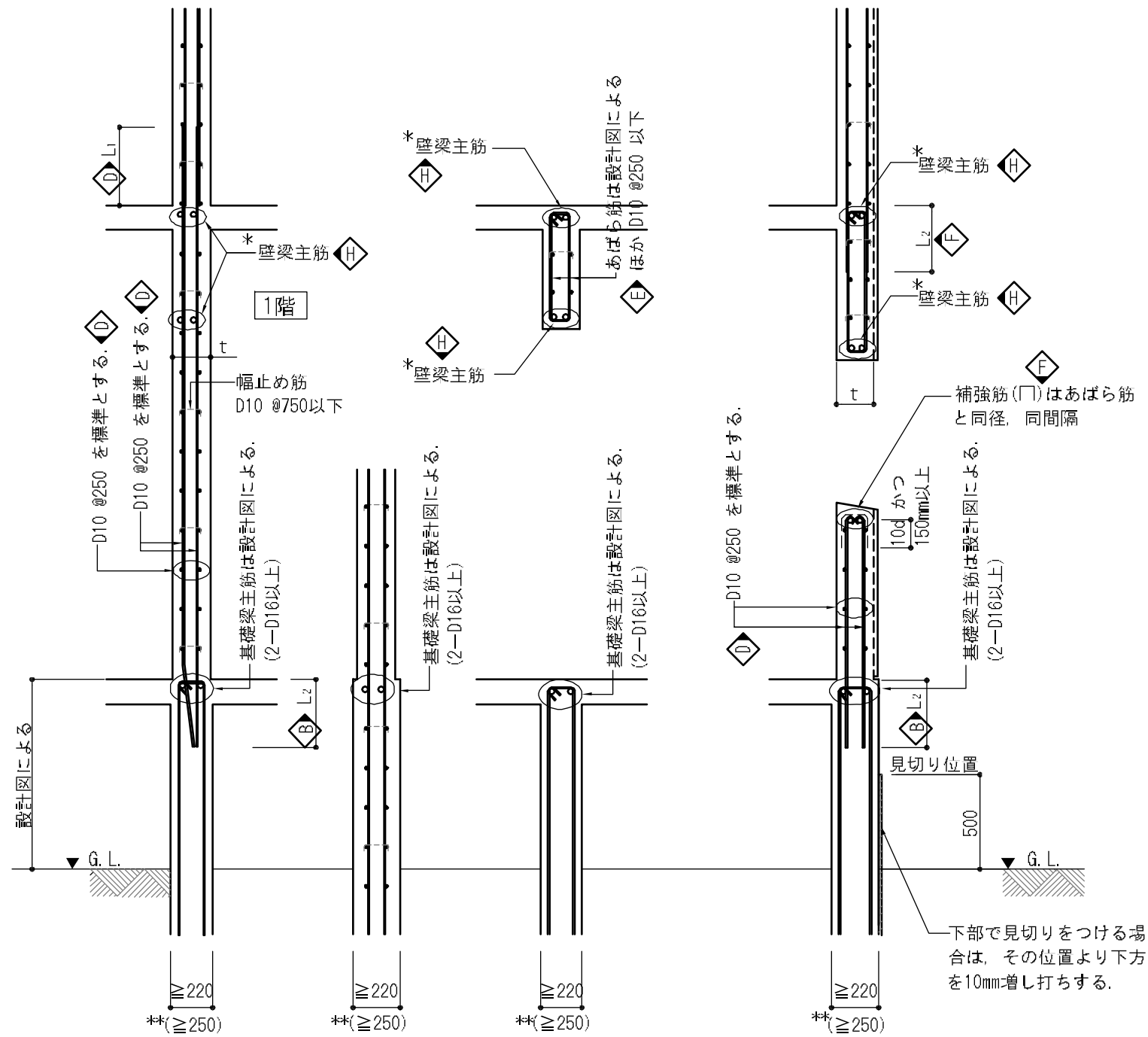
(b) 耐力壁(複配筋)の配筋-1



- Ⓐ 厚さが 200mm 以下の耐力壁配筋はシングル配筋としてよい。なお、耐力壁の配筋量は設計図による。また、各階の縦筋の重ね継手長さは L_1 以上とする。
- Ⓑ 耐力壁縦筋は最上階ではスラブ内に交互に、最下階は基礎梁内にそれぞれ L_2 以上定着する。ただし、片側スラブの場合、および両側スラブで下端筋が通し配筋の場合は 180° のフック付きとしてよい。
- Ⓒ 単配筋耐力壁の縦筋と各階のスラブ上端筋の交差部に D13 以上を配する。
- Ⓓ 厚さが 200mm を超える耐力壁配筋は、全階複配筋とし、配筋量は設計図による。各階の壁筋の継手長さは L_1 とする。
- Ⓔ 壁梁のあばら筋は、耐力壁の配筋と同量以上および同間隔以下とする。
- Ⓕ 腰壁の縦筋は、下階の壁梁内に L_2 定着する。腰壁上部幅止め筋は、径・間隔とも縦筋と同径・同間隔とする。
- Ⓖ 腰壁と一体となった壁梁でも壁梁せいが 1,500mm 以下の場合は、通常の壁梁と同様にあばら筋を配する。
- Ⓗ 各階の壁梁配筋は設計図によるほか、単配筋では 1-D13 以上、複配筋では 2-D13 以上とする。

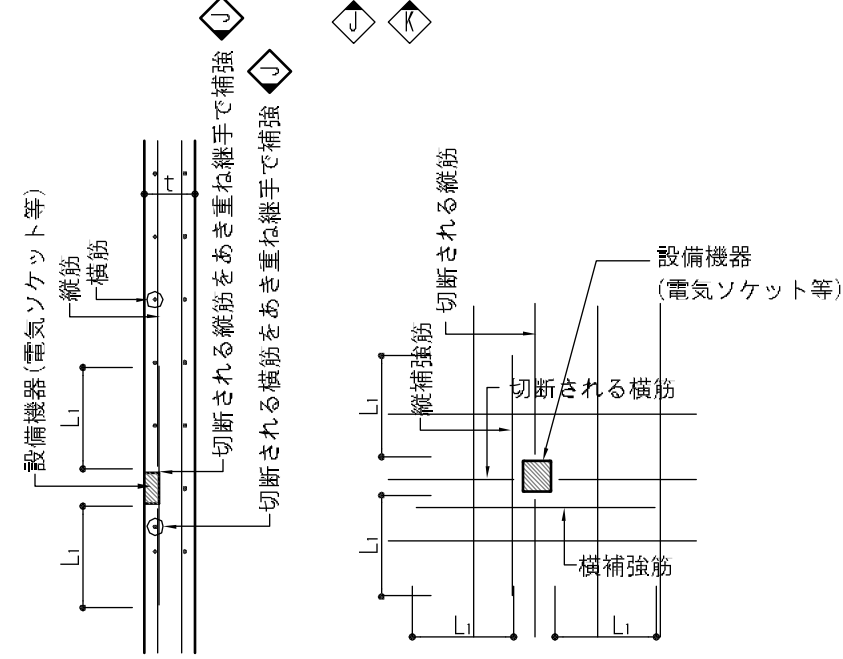
仕	
様	
附記事項	
改訂事項	・複配筋の場合におけるスラブ受け筋を改定。
名称	耐力壁配筋標準(2)
縮尺	SW - 105

(c) 耐力壁(複配筋)の配筋-2

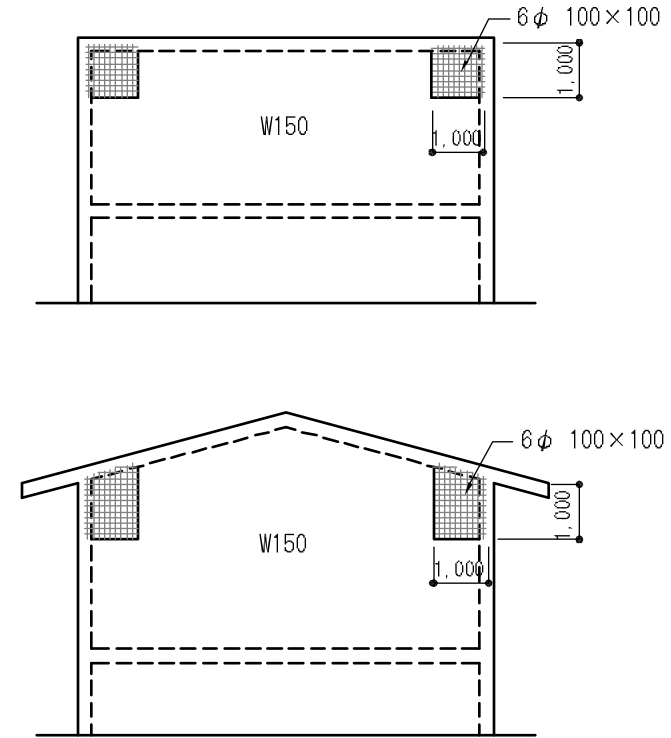


* 壁梁主筋は設計図による。
 ** ()内寸法は杭基礎の場合を示す。

(d) 設備機器埋込み部補強要領



(e) 建物最上階戸境耐力壁隅角部補強要領



◇ B ◇ D ◇ E ◇ F ◇ H SW-105と同じ。

◇ I 建物最上階 W150の戸境耐力壁隅角部には温度応力によるひび割れの発生を防ぐため、溶接金網 6φ100×100を1,000×1,000の範囲に配置する。

◇ J 耐力壁に設ける埋込み機器が耐力壁の横筋ないし縦筋を切断する場合、切断した本数だけ機器の外側に補強筋を記す。この補強筋と耐力壁の配筋はあき重継手とし、継手長さは l_1 とする。なお、埋込み機器が耐力壁の鉄筋を切断しない場合には、補強の必要はない。この場合は設備機器と壁筋とのあきに十分注意する。

◇ K 本記筋要領での配筋が不可能な場合は、開口補強要領に準ずる。

仕
様

附
記
事
項

改
訂
事
項

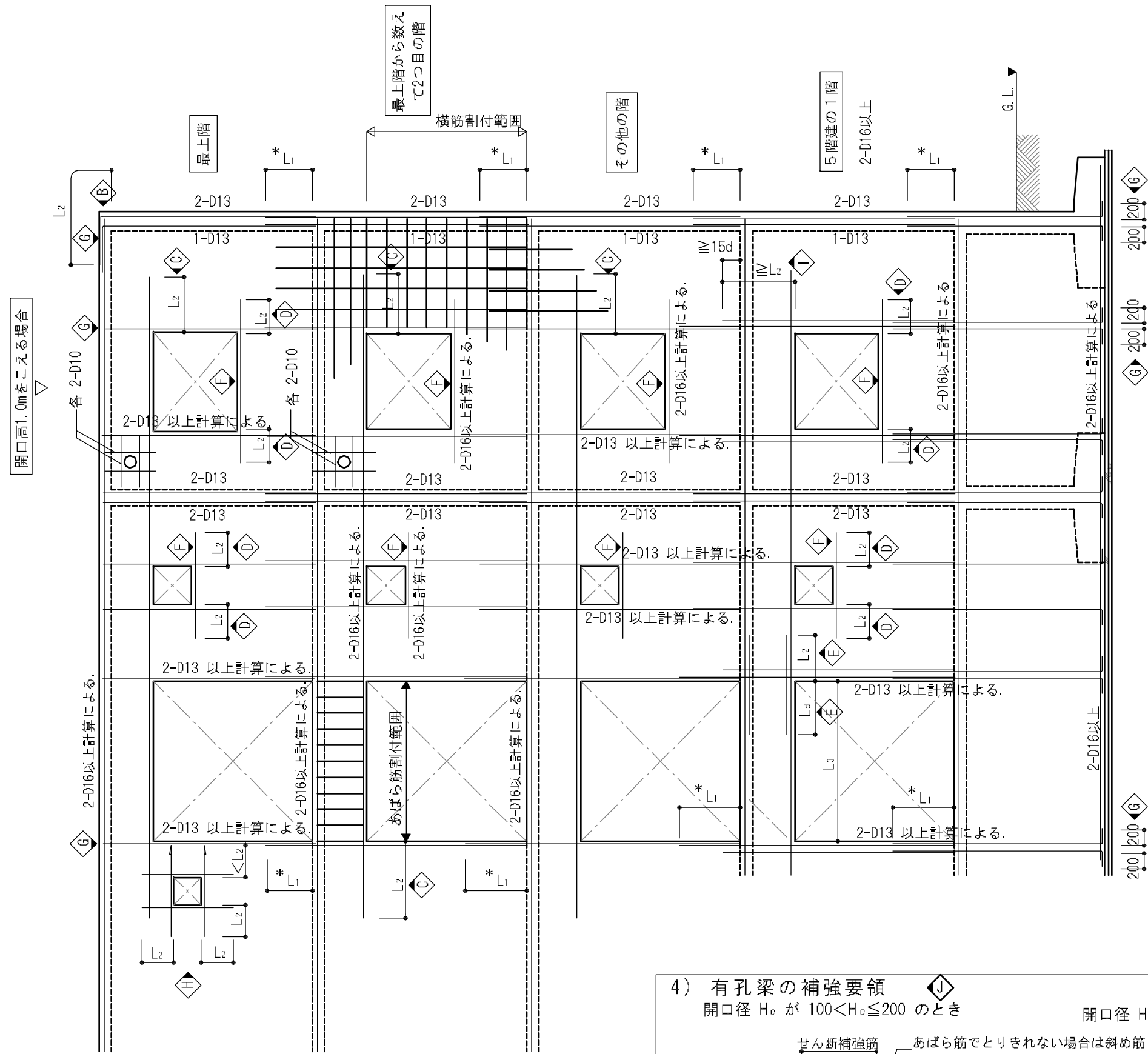
名
称

耐力壁配筋標準(3)

縮
尺

SW - 106

3) 耐力壁配筋要領(開口部補強筋)

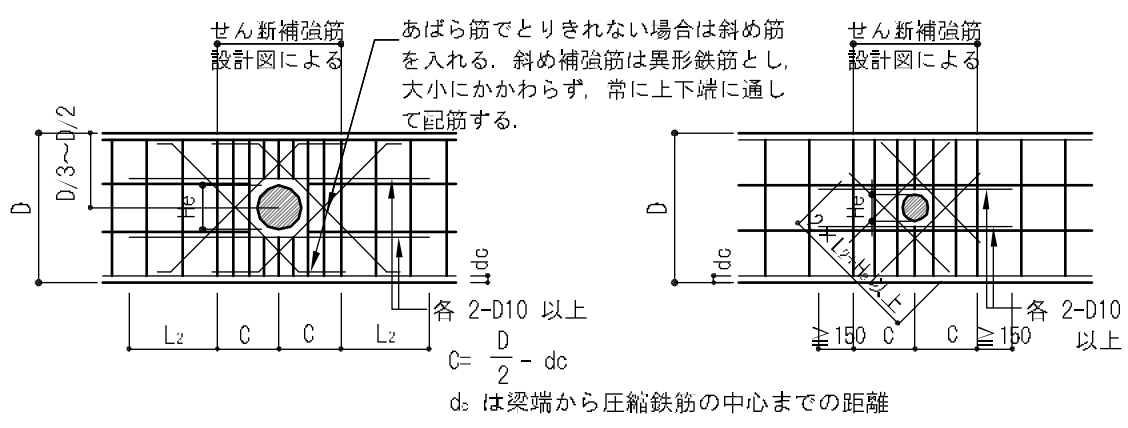


* 本図は耐力壁端部曲げ補強筋が各階とも重ね継手となっているが、鉄筋の定尺を考慮し、必ずしも各階に継手を設けなくともよい。

4) 有孔梁の補強要領

開口径 H_o が $100 < H_o \leq 200$ のとき

開口径 H_o が $H_o \leq 100$ のとき



各 2-D10 以上

各 2-D10 以上

$$C = \frac{D}{2} - d_c$$

d_c : は梁端から圧縮鉄筋の中心までの距離

仕様

附記事項

改訂事項

名称
縮尺

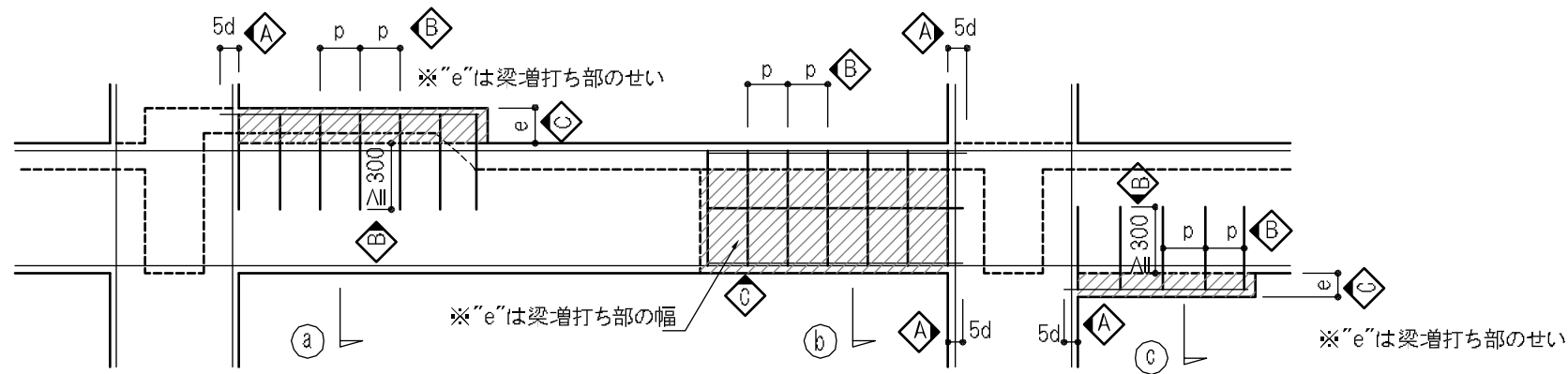
- A 開口部の斜め補強は原則として行わず、斜め補強筋の断面積を壁筋に計算して配筋を行うものとする。ただし、小開口は除く。
- B 壁梁上端主筋は直交壁内に定着し、その定着長は L_2 とする。
- C 壁梁下端主筋は梁端から L_2 の定着をとる。ただし、壁の長さが L_2 より短い場合は不足長さを直交壁に定着する。
- D 壁部分の開口補強筋は、耐力壁筋部より壁内に L_2 定着する。
- E 壁梁内の曲げ補強筋は、耐力壁内に L_2 定着する。なお、梁のカットオフ長さ L_3 は下記による。
 - ・1m未満の場合は開口部通しとする。
 - ・1~3mの場合は $L_3/2$ とする。
 - ・3mを越える場合は $L_3/4+15d$ とする。
- F 壁梁の開口補強筋は、壁筋とは兼用しない。従って、壁の横筋はこの鉄筋を無視して割り付ける。
- G 耐力壁筋部曲げ補強筋は上方へ 15d 以上あるいはスラブ内に L_2 定着し、下部は基礎梁下端まで延長し曲げ込み、余長は 200mm を確保する。
- H 小開口部(開口周長の合計が 1.6m 以下)の開口補強筋は、開口高さ 1.0m 以下の場合は補強方法に準ずるが、縦筋は通さずに L_2 の定着長さをとる。また、補強筋が L_2 の定着をとれない場合は、フックを付けて耐力壁筋部曲げ補強筋に巻き込む。
- I 耐力壁筋部曲げ補強筋の定着は、 L_2 または上階スラブより上方へ 15d 以上とする。
- J 壁梁に設ける開口の形は円形または矩形とし、その有効径(円の直径、外接円の直径)は、壁梁せいの1/3以下とする。また、開口の中心は壁梁上から $D/3 \sim D/2$ の範囲内とすること。

耐力壁配筋標準(4)

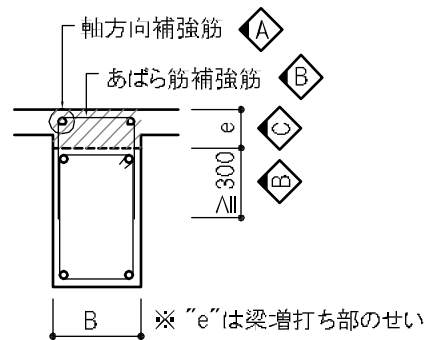
SW - 107

増打ち要領

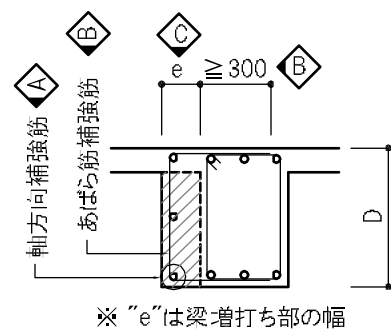
1) 梁増打ちコンクリート



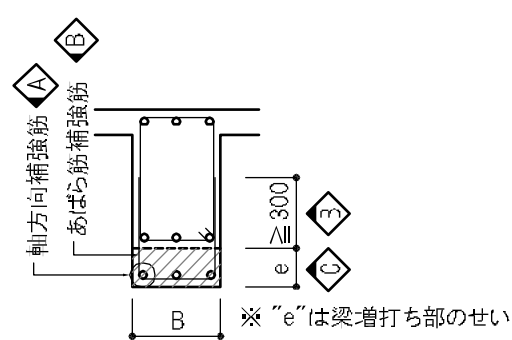
①-② 断面図



③-③ 断面図



④-④ 断面図



軸方向補強筋リスト

B,D(mm)	e(mm)	50 < e ≤ 200
B,D ≤ 300		2 - D16
300 < B,D ≤ 500		3 - D16
500 < B,D ≤ 700		4 - D16
700 < B,D ≤ 900		5 - D16
900 < B,D ≤ 1,100		6 - D16
1,100 < B,D ≤ 1,300		7 - D16

* e ≤ 50mmの場合は補強不要とする.

仕様

- Ⓐ 軸方向補強筋の余長は 50以上とする.
- Ⓑ あばら筋補強筋は D10以上の鉄筋を使用し、間隔はあばら筋と同間隔とする。また、実断面への定着は 300mm以上とする。
- Ⓒ 梁の増打ちコンクリートの厚さ“e”は 200mm以下とする。

附記事項

- ・ 梁の増打ちコンクリートの厚さ“e”が梁全長にわたり200mmを超える場合はこれを正規の断面と考え、正規の計算に取り入れるものとする。
- ・ 50以上の定着をとる場合の補強筋については、構造設計により決定する。

改訂事項

- ・ 本図面追加

名称

増打ち要領

縮尺

SW - 108